

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書原典講読 I a	左近 豊	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 旧約聖書ヒブル語本文を批判的手続きを経ながら読むことを主眼とする。		
<到達目標> 学生がテキストの文献学的諸問題、そして文芸学的特徴を把握することができるようになる。		
<授業の概要> エレミヤ書と哀歌を取り上げる。それぞれに旧約の民の歩みの重要な局面で語られた言葉であり、旧約聖書の人間観、世界観、そして歴史観を反映している。写本、古代訳を参照しつつヒブル語本文を読み、教会での説教、聖書研究における積義に資する諸資料の紹介と活用の実際を学ぶ。		
<履修条件> ヒブル語文法履修者		
<授業計画> 第1回：エレミヤ書 序 1:1-3 第2回：エレミヤ書 1:4-8 第3回：エレミヤ書 1:9-10 第4回：エレミヤ書 1:11-13 第5回：エレミヤ書 1:14-16 第6回：エレミヤ書 1:17-19 第7回：エレミヤ書 2:1-3 第8回：エレミヤ書 2:4-6 第9回：エレミヤ書 2:7-9 第10回：エレミヤ書 2:10-13 第11回：エレミヤ書 2:14-16 第12回：哀歌 1:3~5 第13回：哀歌 1:6~7 第14回：哀歌 1:8~11 第15回：総括		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 事前に当該箇所の上の諸問題を把握し、神学的思索を携えて授業に臨むことが望ましい。		
<テキスト> <i>Biblia Hebraica Stuttgartensia</i> (BHS)		
<参考書・参考資料等> 辞書:F.Brown, S.R.Driver, and C.A.Briggs eds., <i>Hebrew and English Lexicon of the Old Testament</i> . (BDB)、L. Koehler and W.Baumgartner, <i>The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament (HALOT)</i> 、 文法書: <i>Gesenius' Hebrew Grammar</i> 、B.Waltke and M.O'Connor, <i>An Introduction to Biblical Hebrew Syntax</i> 、 H.Bauer and P.Leander, <i>Historische Grammatik der hebraischen Sprache</i> . 参考書:ヴェルトヴァイン著『旧約聖書の本文研究』、E.Tov, <i>Textual Criticism of the Hebrew Bible</i> 、『左近淑著作集 III』、Field, <i>Origenis Hexapla</i> コンコルダンス:Lisowsky, <i>Konkordanz zum Hebraischen Alten Testament</i> 、 S.Mandelkern, <i>Veteris Testamenti concordantiae hebraicae atque chaldaicae</i> 、E.Hatch and H.A.Redpath, <i>A Concordance to the Septuagint and the other Greek Versions of the Old Testament (LXX)</i> など		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業参加 60% 期末レポート 40% 評価にあたっては共通評価指標（1）の①～④の内容を重視する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書原典講読 I b	宮 崎 薫	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 創世記39章～41章（前半）のヘブライ語原典（マソラ本文）を読む。		
<到達目標> 辞書を用い、ヘブライ語本文の語分析、構文批判等により、テキストを正確に読み、文章の意味を深く理解することができる。BHSの脚注記（アパラータス）およびマソラが解読できる。		
<授業の概要> 創世記「ヨセフ物語」の39章から41章（24節まで）を原典で読む。辞書（BDB）を用い原語を丁寧に分析し、翻訳をする。歴史的背景を考慮しつつ、資料説、伝承史等を検討し、文学的特徴や手法、および神学的メッセージを探る。「ヨセフ物語」が書かれた目的や旧約全体における位置づけと意義についても考察したい。		
<履修条件> ヘブライ語の基礎文法修得者。旧約専攻でなくともよい。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 創世記 39：1-2 ヨセフ、ポティファルに仕える 第2回 創世記 39：3-6 ヨセフを主が祝福する 第3回 創世記 39：7-10 ヨセフ、誘惑を受ける 第4回 創世記 39：11-18 ヨセフ、誘惑を退ける 第5回 創世記 39：19-23 ヨセフ、投獄される 第6回 創世記 40：1-6 牢獄でのヨセフ 第7回 創世記 40：7-11 ヨセフ、役人の夢を解く 第8回 創世記 40：12-17 ヨセフ、献酌官長の夢を解く 第9回 創世記 40：18-23 ヨセフ、料理長の夢を解く 第10回 創世記 41：1-4 ファラオ、夢を見る 第11回 創世記 41：5-8 ファラオ、再び夢を見る 第12回 創世記 41：9-13 献酌官長の申し出 第13回 創世記 41：14-16 ファラオ、ヨセフを呼ぶ 第14回 創世記 41：17-21 ファラオ、第一の夢をヨセフに語る 第15回 創世記 41：22-24 ファラオ、第二の夢をヨセフに語る		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 該当箇所の予習は、各自ノートに書いて準備した上で、授業に臨むこと。		
<テキスト> 聖書：Biblia Hebraica Stuttgartensia（BHS）、新共同訳、聖書協会共同訳等の諸翻訳。各自購入する。		
<参考書・参考資料等> 辞書：The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon（BDB）、文法書：『ヒブール語入門』[改訂増補版]、左近義慈／本間敏雄、教文館、2011年。以上は各自購入。参考書：『BHSのマフテアハ』小林洋一編訳（ヨルダン社、1999年）、『旧約聖書の本文研究』E.ヴェルトヴァイン（鍋谷／本間共訳、二本キリスト教団出版局、2007年）、以上は図書館蔵書を利用する（教員が授業の中で都度指示する）。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業参加度、予習状況と課題発表、レポートにより総合的に評価する。評価にあたっては、共通評価指標（1）の①～④の内容を重視する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書原典釈義 I a	大島 力	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> イザヤ書45-49章の原典釈義		
<到達目標> 受講生が、第二イザヤ書（40-55章）の思想内容を原典釈義に基づき理解する。		
<授業の概要> イザヤ書45章以下の原典を音読し、日本語に翻訳する。各単元の文学的構造に着目し、その思想を読み取る。		
<履修条件> ヘブライ語基礎文法履修者であること。		
<授業計画> 第1回 ガイダンス 第2回 イザヤ書45：14-19 第3回 45：20-25 第4回 46：1-7 第5回 46：8-13 第6回 47：1-4 第7回 47：5-12 第8回 47：13-15 第9回 48：1-6 第10回 48：7-11 第11回 48：12-16 第12回 48：17-22 第13回 49：1-7 （「主の僕の詩」第2詩） 第14回 49：8-13 第15回 49：14-21 総括		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 ヘブライ語の該当本文の語彙を調べ、文法的説明ができるように準備して臨むこと。		
<テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS)		
<参考書・参考資料等> F.Brown,S.R.Driver,and C.A.Briggs eds.,Hebrew and English Lexicon of the Old Testament.(BDB). L.Koehler and W.Baumgartner,The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament.(HALOT) その他は、講義時に紹介する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 毎回の授業課題と期末レポート（3000字程度） レポートは「共通評価指標（1）」によって評価する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書原典釈義 I b	大島 力	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> イザヤ書49-55章の原典釈義		
<到達目標> 受講生が第二イザヤ書（40-55章）の思想内容を原典釈義に基づき理解する。		
<授業の概要> イザヤ書49章以下の原典を音読し、日本語に翻訳する。各単元の文学的構造に着目し、その思想を読み取る。		
<履修条件> ヘブライ語基礎文法履修者であること。		
<授業計画> 第1回 イザヤ書49：22-50：3 第2回 50：4-9 （「主の僕の詩」第3詩） 第3回 50：10-11 第4回 51：1-8 第5回 51：9-16 第6回 51：17-23 第7回 52：1-12 第8回 52：13-15 （「主の僕の詩」第4詩 苦難の僕の詩） 第9回 53：1-6 （ 〃 ） 第10回 53：7-12 （ 〃 ） 第11回 54：1-8 第12回 54：9-17 第13回 55：1-7 第14回 55：8-13 第15回 総括		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分~240分を目安とする。 ヘブライ語の該当本文の語彙を調べ、文法的説明ができるように準備して臨むこと。		
<テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS)		
<参考書・参考資料等> F.Brown,S.R.Driver,and C.A.Briggs eds.,Hebrew and English Lexicon of the Old Testament.(BDB). L.Koehler and W.Baumgartner,The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament.(HALOT) その他は、講義時に紹介する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 毎回の授業課題と期末レポート（3000字程度） レポートは「共通評価指標（1）」によって評価する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書学特研 I a	田中 光	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>特になし。	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 詩編の解釈		
<到達目標> 詩編の言葉を原点や諸翻訳（古代語訳含む）によって丁寧に読み、その神学的メッセージを理解すること。		
<授業の概要> 各詩編を次のようなプロセスで読解していく。①詩編のヘブライ語原典の内容を精読し、本文批評的問題を BHS のアパラタスその他によって確認する。②注解書その他によりながら、詩編の種類、歴史的背景、神学的メッセージなどについて討論する。		
<履修条件> ヒブル語の講義を受講して基礎文法を習得していることが望ましい。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション&イントロダクション（+詩編総論①） 第2回 詩編総論② 第3回 詩編 17 編① 原典の講読 第4回 詩編 17 編② 解釈に関する討論 第5回 詩編 18 編① 原典の講読 第6回 詩編 18 編② 解釈に関する討論 第7回 詩編 19 編① 原典の講読 第8回 詩編 19 編② 解釈に関する討論 第9回 詩編 20 編① 原典の講読 第10回 詩編 20 編② 解釈に関する討論 第11回 詩編 21 編① 原典の講読 第12回 詩編 21 編② 解釈に関する討論 第13回 詩編 22 編① 原典の講読 第14回 詩編 22 編② 解釈に関する討論 第15回 全体のまとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 事前に指示された予習（ヒブル語テキストの読解や参考書の読解）をきちんと行って授業にのぞむこと。		
<テキスト> 特に定めない。		
<参考書・参考資料等> 初回授業にて指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 各授業における予習・参加の度合いと、期末のペーパー（4000字程度）によって評価する。評価は「共通評価指標」（1）に基づいて行う。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書学特研 I b	田中 光	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>特になし。	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 原初史（創世記1-11章）の解釈。		
<到達目標> 原初史を文献学的、神学的に解釈することができるようになること。		
<授業の概要> はじめに原初史の解釈史を概観した後、原初史のテキストを原典（あるいは翻訳）で読み、且つ、注解書などによりながら解釈の討論をしつつ学びを深める。		
<履修条件> ヒブル語の講義を受講して基礎文法をある程度習得していることが望ましい。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション&イントロダクション 第2回 原初史の解釈の歴史 第3回 天地創造（創世記1章1節～2章4節）① ヒブル語テキストの読解 第4回 天地創造（創世記1章1節～2章4節）② 解釈に関する討論 第5回 エデンの園（創世記2章4節～3章24節）① ヒブル語テキストの読解 第6回 エデンの園（創世記2章4節～3章24節）② 解釈に関する討論 第7回 洪水までのアダムの子孫（創世記4章1節～6章8節）① ヒブル語テキストの読解 第8回 洪水までのアダムの子孫（創世記4章1節～6章8節）② 解釈に関する討論 第9回 洪水（創世記6章9節～8章22節）①ヒブル語テキストの読解 第10回 洪水（創世記6章9節～8章22節）②解釈に関する討論 第11回 洪水後の新しい秩序とノアの子孫（創世記9章1節～10章32節）①ヒブル語テキストの読解 第12回 洪水後の新しい秩序とノアの子孫（創世記9章1節～10章32節）②解釈に関する討論 第13回 バベルの塔とアブラハムに至る系図（創世記11章1節～32節）①ヒブル語テキストの読解 第14回 バベルの塔とアブラハムに至る系図（創世記11章1節～32節）②解釈に関する討論 第15回 全体のまとめと結論的考察		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 事前に指示された予習（ヒブル語テキストの読解や参考書の読解）をきちんと行って授業にのぞむこと。		
<テキスト> 特に定めない。		
<参考書・参考資料等> 初回授業において指示する。ここでは参考になる最近の著作を一冊を挙げておく（必ずしも購入しなくともよい） J. Blenkinsopp, <i>Creation, Uncreation, Re-creation: A Discursive Commentary on Genesis 1-11</i> (New York: T & T Clark, 2011).		
<学生に対する評価（方法・基準）> 各授業における予習・参加の度合いと、期末のペーパー（4000字程度）によって評価する。評価は「共通評価指標」（1）に基づいて行う。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書学演習 I a	矢田 洋子	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 旧約聖書学の基本文献をじっくり読み、旧約学の基本知識を身に着ける。		
<到達目標> 旧約聖書神学の基本的用語を理解することにより、旧約学の専門書を読んで理解できるようになる。		
<授業の概要> ブルグマン『旧約聖書神学用語辞典』のすべての項目を読み、毎回その内容をめぐって議論する。毎回、参加者に内容報告をしていただく。		
<履修条件> ヘブライ語の知識はなくてもよい。旧約専攻以外の方々の履修を期待する。		
<授業計画> 第1回：オリエンテーション、愛、贖い、 第2回：アシェラ、アッシリア、荒れ野、安息日、イゼベル、一神教、祈り 第3回：栄光、エジプト、エズラ、選び、エリヤ、エルサレム、王権／王制 第4回：応報、割礼、カナン人、金、神顕現、神の似姿、神の箱、感謝 第5回：義、聞く、犠牲、奇跡、希望、教育、共同体、寄留者 第6回：悔い改め、苦難の僕、苦しみ、契約、契約の書、混沌、祭司 第7回：祭司伝承、サタン、サマリア人、賛美、死、十戒、祝祭、祝福 第8回：出エジプト、主の日、書記、贖罪、神義論、信仰、神殿、申命記神学 第9回：救い、性、聖／聖性、正典、聖なる高台、戦争、創造、族長 第10回：墮罪、ダビデ、地、知恵、罪、天使、伝承、天上の会議 第11回：トラー、嘆き、残りの者、バアル、バビロン、ハンナ、ヒゼキヤの改革 第12回：復讐、復活、プリム、フルダ、ペルシア、ヘレム、豊穡宗教、暴力 第13回：捕囚、ミリアム、メシア、黙示思想、モーセ、約束、寡婦、赦し 第14回：預言者、ヨシヤの改革、ヨベル、隣人、倫理、霊、礼拝 第15回：歴史、歴代誌史家、災い、YWYH、全体のまとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 発表は発表準備。発表者以外にも、あらかじめ辞典項目を読んでおくこと。		
<テキスト> W.ブルグマン（小友左近監訳）『旧約聖書神学用語辞典』日本キリスト教団出版局 2015年、6820円。 各自で購入すること。		
<参考書・参考資料等> A.ベルレング／C.フレーフェル（山吉訳）『旧約新約聖書神学事典』教文館、その他は授業で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表の内容、及び、提出していただくレポートによって評価する。共通評価指標（1）を用いる。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書学演習 I b	矢田 洋子	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> ヘブライ語の単語に注目して旧約聖書を読む。コンコーダンスと旧約神学用語辞典の利用。		
<到達目標> ヘブライ語のコンコーダンスを使えるようになる。旧約神学用語辞典を読みこなす。それらを通して、ヘブライ語を履修していない人、聖書神学専攻でない人でも、「ヘブライ語で」旧約聖書が読めるようになる。		
<授業の概要> 時間を表すヘブライ語に注目することによって、旧約聖書の時間概念を究明する。毎回、参加者に発表をしていただく。		
<履修条件> ヘブライ語の知識があらかじめある必要はないが、コンコーダンスや神学用語辞典を利用できる程度にはヘブライ語アルファベットの識別などを身につけていただくことになります。		
<授業計画> 第1回：オリエンテーション 第2回：ヘブライ語の時間概念 Jenni, "Time", <i>The Interpreter's Dictionary of the Bible</i> 第3回：עת (時)、זמן (時) 第4回：מועד (定められた時) 第5回：יום (日) 第6回：רגע (瞬間)、קטן (束の間の)、 第7回：קץ (終わり) 第8回：אחרית (終わり) 第9回：קדם (始めに、前に)、 第10回：דור (世代) 第11回：עולם (永遠)、 第12回：עד (永遠)、נצח (永遠)、 第13回：שנה (年)、חדש (月) 第14回：עהת (今)、תמיד (常に) 第15回：まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 発表準備に加えて、毎回、あらかじめ取り上げる単語に注目して聖書を読んでおくこと。		
<テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia		
<参考書・参考資料等> <i>Theological Dictionary of the Old Testament</i> の各項目；G.Lisowsky, <i>Konkordanz zum Hebräischen Alten Testament</i> , その他の参考文献はそのつど指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表の内容、及び、提出していただくレポートによって評価する。共通評価指標（1）を用いる。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
アラム語 a	佐藤 泉	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ>旧約聖書原典の一部はアラム語で書かれており、古代訳の中にはアラム語訳旧約聖書のタルグムがある。そのようなアラム語のテキストを読むためのアラム語文法の基礎を学ぶ。マソラテキストとタルグムの比較を行う基礎を養う。		
<到達目標>①アラム語文法の基礎を身につける。②身につけたアラム語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、聖書のアラム語のテキストや古代訳の一つであるタルグムを読むことができるようになる。		
<授業の概要>聖書のアラム語のテキストを実際に読みながら（創世記31：47・エレミヤ10：11・エズラ4：8-24・5：1-17など）、アラム語文法を学ぶ。		
<履修条件>ヒブル語履修済みであること。		
<授業計画> 第1回：序 アラム語について、言語グループ、時代区分などを話す。 第2回：創世記31：47を読みつつ、アラム語の名詞・形容詞を学ぶ。 第3回：エレミヤ10：11を読みつつ、動詞の Peal 形の完了・未完了を学ぶ。 第4回：エズラ4：8-24の講読(1) 不規則変化の名詞について学ぶ。 第5回：エズラ4：8-24の講読(2) 動詞の Hapel 形の完了を学ぶ。 第6回：エズラ4：8-24の講読(3) 動詞の Peal 形の分詞、Hitpeel 形の完了・未完了を学ぶ。 第7回：エズラ4：8-24の講読(4) 動詞の Pael 形の完了・未完了、Hapel 形の未完了を学ぶ。 第8回：エズラ4：8-24の講読(5) 動詞の Hapel 形の分詞を学ぶ。 第9回：エズラ4：8-24の講読(6) 動詞の Pael 形・Hitpeel 形・Hitpaal 形の分詞を学ぶ。 第10回：エズラ4：8-24の講読(7) 二根字動詞の Peal 形と動詞の不定詞・命令を学ぶ。 第11回：エズラ5：1-17の講読(1) 前置詞と代名詞語尾を学ぶ。 第12回：エズラ5：1-17の講読(2) 二根字動詞の Hapel 形を学ぶ 第13回：エズラ5：1-17の講読(3) 二根字動詞の Hitpeel 形を学ぶ。 第14回：エズラ5：1-17の講読(4) Pê Yôd 動詞の変化を学ぶ。 第15回：エズラ5：1-17の講読(5) Pê Nûn 動詞の変化を学ぶ。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。講読箇所として指示されているアラム語テキストについて、できる範囲で準備すること。講読箇所について、マソラテキストのアパラートゥスにも注意を払うこと。		
<テキスト>Biblia Hebraica Stuttgartensia ; Biblia Hebraica Quinta -20- Ezra and Nehemiah ; Franz Rosenthal, A Grammar of Biblical Aramaic, Harrassowitz Verlag・Wiesbaden, 1995, Sixth, revised edition (テキストについては初回授業時に担当者が説明する。)		
<参考書・参考資料等>左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011 ; William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971 ; Gustaf Dalman, Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft , 1960 ; Marcus Jastrow, A dictionary of Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic literature v1, v2, New York: Pardes, 1950		
<学生に対する評価（方法・基準）>予習・復習、積極的な授業参加の状況、講読箇所に関する発表、単語等に親しむための小テスト等によって成績をつける。なお、評価にあたっては、「共通評価指標（1）」の①～④の内容を重視する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
アラム語 b	佐藤 泉	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ>旧約聖書原典の一部はアラム語で書かれており、古代訳の中にはアラム語訳旧約聖書のタルグムがある。そのようなアラム語のテキストを読むためのアラム語文法の基礎を学ぶ。マソラテキストとタルグムの比較を行う基礎を養う。		
<到達目標>①アラム語文法の基礎を身につける。②身につけたアラム語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、聖書のアラム語のテキストや古代訳の一つであるタルグムを読むことができるようになる。		
<授業の概要>聖書のアラム語のテキストを実際に読みながら（ダニエル書）、アラム語文法の学びを継続する。さらに、エレミヤ書などのタルグムの講読もする。（箇所は未定。授業中に指示する。）		
<履修条件>ヒブル語履修済みであること。		
<授業計画> 第1回：ダニエル書の緒論的知識を確認し、前期の文法の復習をしつつ、ダニエル書の講読に備える。 第2回：ダニエル書の講読(1) Pè' ālep 動詞の Peal 形を学ぶ。 第3回：ダニエル書の講読(2) Pè' ālep 動詞の Hapel 形を学ぶ。 第4回：ダニエル書の講読(3) 動詞の変化で音位転換が起こる場合について学ぶ。 第5回：ダニエル書の講読(4) Lamed' ālep・Lamed Hé 動詞の変化を学ぶ。 第6回：ダニエル書の講読(5) 二重' ayin 動詞の Peal 形を学ぶ。 第7回：ダニエル書の講読(6) 二重' ayin 動詞の Hopal 形を学ぶ。 第8回：ダニエル書の講読(7) 代名詞語尾付きの動詞の変化を学ぶ。 第9回：ダニエル書の講読(8) 喉音を含む動詞について学ぶ。 第10回：ダニエル書の講読(9) 特殊な変化をする動詞について学ぶ。 第11回：エレミヤ書の緒論的知識とバビロニア方式の母音記号を確認し、タルグムの講読に備える。 第12回：タルグムの講読(1) バビロニア方式の母音記号で読むことに慣れる。 第13回：タルグムの講読(2) タルグムのアラム語の動詞の変化を学ぶ。 第14回：タルグムの講読(3) アラム語文法を全体的に思い出しつつ読む。 第15回：タルグムの講読(4) 原典や七十人訳と比較しつつ読むことを味わう。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 講読箇所として指示されているアラム語テキストについて、できる範囲で準備すること。講読箇所について、マソラテキストのアパラートゥスにも注意を払うこと。		
<テキスト>Biblia Hebraica Stuttgartensia ; The Pentateuch according to Targum Onkelos; The Former Prophets according to Targum Jonathan; The Latter Prophets according to Targum Jonathan ; Franz Rosenthal, A Grammar of Biblical Aramaic, Harrassowitz Verlag・Wiesbaden, 1995, Sixth, revised edition (テキストについては初回授業時に担当者が説明する。)		
<参考書・参考資料等>左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011 ; William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971 ; Gustaf Dalman, Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft , 1960 ; Marcus Jastrow, A dictionary of Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic literature v1, v2, New York: Pardes, 1950		
<学生に対する評価（方法・基準）>予習・復習、積極的な授業参加の状況、講読箇所に関する発表、単語等に親しむための小テスト等によって成績をつける。なお、評価にあたっては、「共通評価指標（1）」の①～④の内容を重視する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
古代オリエント史Ⅱ a	月本 昭男	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> メソポタミアを中心にした古代オリエントの文明史一起源からハンムラビ時代まで—		
<到達目標> 古代オリエント文明の特色を学び、古代イスラエル史ならびに旧約聖書との関連性を具体的に理解する。		
<授業の概要> パワーポイントを用いて古代オリエント文明の源流となるシュメルの歴史と文化を紹介し、旧約聖書との関連を考える。		
<履修条件> 履修条件にはしないが、古代イスラエル史を習得していることが望ましい。		
<授業計画> 第1回 古代オリエント文明の三つの柱 第2回 ウルク期：シュメル文明のはじまり 第3回 楔形文字とアルファベット 第4回 シュメル初期王朝期第Ⅰ、Ⅱ期 第5回 シュメル初期王朝期第Ⅲ期 第6回 ウルの王墓について 第7回 ウル・イニムギナ：最古の社会改革 第8回 アッカド王朝の歴史 第9回 アッカド王朝期の図像資料 第10回 ラガシュの王グデア 第11回 ウル第Ⅲ王朝の歴史 第12回 ウル第Ⅲ王朝期の図像資料 第13回 ウル第Ⅲ王朝期の文学 第14回 イシン・ラルサ時代 第15回 ハンムラビ王朝とハンムラビ法典		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 受講生にとっては初めて紹介される資料がほとんどなので、前回の復習をして、毎回の授業に臨むこと。		
<テキスト> 特に用いないが、下に掲げる参考書を自習しておくこと。		
<参考書・参考資料等> 月本昭男（監修）『古代メソポタミアの光芒』（山川出版社、2011年）、前川和也『図説メソポタミア文明』（河出書房新社、2011年）、小林登志子『古代オリエント全史』（中公新書、2022年）		
<学生に対する評価（方法・基準）> 出席と学期末レポート。レポートは、共通評価指標（1）に基づいて行う。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
聖書考古学 a	月本 昭男	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	該当せず	
<授業のテーマ> 考古資料に基づく旧約聖書の歴史と文化。		
<到達目標> 旧約聖書の歴史と文化の理解に欠かせない考古学的資料のもつ重要性を理解する。		
<授業の概要> パワーポイントを用いて考古資料（遺構、遺物、文書）を紹介し、旧約聖書の歴史的・文化史的背景を論ずる。		
<履修条件> 古代イスラエル史の基本を習得していること。聖書ヘブライ語基本文法を習得していることが望ましい。		
<授業計画> 第1回 遺跡と遺跡調査、聖書考古学の範囲 第2回 イスラエルの起源をめぐる考古学研究 第3回 都市の構造①城壁、城門、公共建造物 第4回 都市の構造②給水施設、一般住居の構造 第5回 統一王朝時代は Kingdom か、Chiefdom か 第6回 アッシリアと北イスラエル 第7回 アッシリアとユダ王国 第8回 古代ヘブライ文字と碑文 第9回 古代イスラエルの印章 第10回 イスラエルの周辺民族 第11回 考古学からみたエデンの園の物語 第12回 考古学からみたバベルの塔の物語 第13回 古代イスラエルの埋葬法と他界観 第14回 考古資料からみた祈りの現象学 第15回 日本調査団によるイスラエル遺跡調査		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 毎回の準備学習は必要ないが、授業開始前に下に掲げる参考書を少なくとも一冊、読み通しておくこと。		
<テキスト> 特に定めない。		
<参考書・参考資料等> 月本昭男『目で見える聖書の時代』（日本キリスト教団出版局、第10版、2019年）、長谷川修一『旧約聖書の世界と時代』（日本キリスト教団出版局、2011年）		
<学生に対する評価（方法・基準）> クラスへの積極参加と学期末レポート。レポートは、共通評価指標（1）に基づいて行う。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
修士論文指導演習 旧約神学 I	田中 光	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>2024 年度に旧約聖書神学の分野で修士論文を提出予定の者	
教職課程における要件・区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 旧約聖書学の範疇で修士論文を作成すること。		
<到達目標> 修士論文の作成を通して、自らの神学的問いを発見し、その問いと取り組むことによって一つの答えを導き出すこと。		
<授業の概要> 序盤で論文の書き方を確認し、その後、次のような順で学生に発表していただく。1) 興味関心を持つ主題・テキストの選定、2) 興味関心を持つ分野についてのリサーチ、3) 問いの発見、4) テーゼの発見		
<履修条件> 2024 年度に旧約聖書神学の分野で修士論文を提出予定の者。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション&イントロダクション（修士論文作成の意義とプロセスの概観） 第2回 論文執筆の方法① 課題の認識とリサーチについて 第3回 論文執筆の方法② 問いの発見と論文の種類について（説明論文と論証論文） 第4回 論文執筆の方法③ 聖書学の文献の種類と利用方法について 第5回 論文執筆の方法④ アウトラインとパラグラフについて 第6回 論文執筆の方法⑤ 序、本論、結論それぞれの書き方について 第7回 学生による発表① 興味関心を持つ主題・テキストの選定① 第8回 学生による発表② 興味関心を持つ主題・テキストの選定② 第9回 学生による発表③ 興味関心を持つ分野についてのリサーチ① 第10回 学生による発表④ 興味関心を持つ分野についてのリサーチ② 第11回 学生による発表⑤ 興味関心を持つ分野についてのリサーチ③ 第12回 学生による発表⑥ リサーチの継続+問いの発見とテーゼの可能性の模索① 第13回 学生による発表⑦ リサーチの継続+問いの発見とテーゼの可能性の模索② 第14回 学生による発表⑧ リサーチの継続+問いの発見とテーゼの可能性の模索③ 第15回 これまでの学びの振り返りと今後の論文作成プロセスの確認		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 論文の書き方についてのレクチャーをきちんと受講した上で、自らの研究に関するリサーチを着実に進めること。		
<テキスト> 特に定めない。		
<参考書・参考資料等> 澤田昭夫『論文の書き方』講談社学術文庫、1977年。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 各回の発表によって評価する。修士論文用の共通評価指標（2）によって評価する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
修士論文指導演習 旧約神学Ⅱ	小友 聡 田中 光	<担当形態> 複数
前期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 今年度前期末に修士論文を提出しようとする前期課程2年次生の論文執筆の指導と情報交換を行う。		
<到達目標> 修士課程修了にふさわしい論文を執筆、完成させる。		
<授業の概要> 論文の準備研究を各自が発表し、参加者がこれについて質問し、意見を述べる。		
<履修条件> 本年9月に旧約に関する修士論文提出予定者は必ず参加すること。		
<授業計画> 第1回 導入。論文執筆の手順 第2回 問題設定 律法関係 第3回 問題設定 預言者関係 第4回 問題設定 文学関係 第5回 研究史 律法関係 第6回 研究史 預言者関係 第7回 研究史 文学関係 第8回 主要テーゼ 律法関係 第9回 主要テーゼ 預言者関係 第10回 主要テーゼ 文学関係 第11回 論証過程 律法関係 第12回 論証過程 預言者関係 第13回 論証過程 文学関係 第14回 結論 第15回 最終的な質疑応答		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180～240分を目安とする。 割り当てられた課題を発表できるようにする。		
<テキスト> 論文執筆者別に指示する。		
<参考書・参考資料等> 毎回必要な文献を指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 学期末には暫定的に可否のみ通知するが、最終的に提出論文の成績が本演習の成績となる。共通評価指標（2）を用いる。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書学特講 I a	中野 実	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>とくになし	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ>新約聖書文書の積義的分析を通して、各文書に特有の神学的メッセージを明らかにする。		
<到達目標>ヘブライ書の積義的分析を通して、積義する力を養い、新約聖書へのより深い理解に達することができるようになる。		
<授業の概要>ヘブライ書に関する序論（緒論的諸問題）の講義の後、各自が分担協力して積義を行い、ヘブライ書の神学を明らかにしていく。		
<履修条件>とくになし。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 序論：歴史的諸問題 第3回 序論：文学的諸問題 第4回 1章1～4節 第5回 1章5節～14節 第6回 2章1～4節 第7回 2章5～18節 第8回 3章1～6節 第9回 3章7～19節 第10回 4章1～11節 第11回 4章12～13節、14～16節 第12回 5章1～10節 第13回 5章11節～6章3節 第14回 6章4～12節 第15回 6章13～20節		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 毎回課題テキストをギリシャ語で読む。さらに該当する箇所に関して、日本語で読める註解書に一通り目を通す。 英語（あるいは他の外国語）の註解書を少なくとも一冊は用いるよう努力する。		
<テキスト>ギリシャ語新約聖書		
<参考書・参考資料等>必要に応じてクラスで指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）>出席が三分の二に達していない場合は、原則として評価の対象にしない。評価は、共通評価指標（1）に基づいて、総合的に（出席、参加度、発表の成果）なされる。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書学特講 I b	中野 実	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>とくになし。	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ>新約聖書文書の積義的分析を通して、各文書に特有の神学的メッセージを明らかにする。		
<到達目標>ヘブライ書の積義的分析を通して、積義する力を養い、新約聖書へのより深い理解に達することができるようになる。		
<授業の概要>前期に引き続き、ヘブライ書の積義的分析を行う。各自が分担協力して行っていく。		
<履修条件>とくになし。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 7章 1-10 節 第3回 7章 11-19 節 第4回 7章 20-28 節 第5回 8章 1-6 節 第6回 9章 1-10 節 第7回 9章 11-14 節 第8回 9章 15-22 節 第9回 9章 23-28 節 第10回 10章 1-10 節 第11回 10章 11-18 節 第12回 10章 19-25 節 第13回 10章 26-31 節 第14回 10章 32-39 節 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 毎回課題テキストをギリシャ語で読む。さらに該当する箇所に関して、日本語で読める註解書に一通り目を通す。 英語（あるいは他の外国語）の註解書を少なくとも一冊は用いるよう努力する。		
<テキスト>ギリシャ語新約聖書		
<参考書・参考資料等>必要に応じて、クラスで指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）>出席が三分の二に達していない場合は、原則として評価の対象にしない。評価は、共通評価指標（1）に基づいて、総合的に（出席、参加度、発表の成果）なされる。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書原典釈義 I a	遠藤 勝信	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> ヨハネによる福音書 2：1～4：30 の原典釈義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。		
<到達目標> 学生が、新約聖書学の基礎（研究史、釈義の方法論）を修得し、テキストと真摯に向き合う姿勢を学ぶ。		
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向（研究史、方法論）を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。		
<履修条件> 新約ギリシア語原典テキスト読解力を有すること。ギリシア語中級文法の知識があることが望ましい。		
<授業計画> I. 講義を中心に 第01回 研究史を概観し、近年の研究状況と釈義の諸問題を学ぶ。 第02回 ギリシア語新約聖書本文批評の実際。 第03回 テキストの文学批評の実際。 第04回 テキストと歴史批評の実際。 第05回 ヨハネ1章の概要 II. 演習（参加者による釈義の発表とディスカッション）を中心に 第06回 ヨハネ02：01～12の原典釈義 第07回 ヨハネ02：13～25の原典釈義 第08回 ヨハネ03：01～10の原典釈義 第09回 ヨハネ03：11～21の原典釈義 第10回 ヨハネ03：22～30の原典釈義 第11回 ヨハネ03：31～36の原典釈義 第12回 ヨハネ04：01～10の原典釈義 第13回 ヨハネ04：11～19の原典釈義 第14回 ヨハネ04：20～30の原典釈義 III. 総括 第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 クラスで取り上げる新約聖書テキストをギリシア語文法に則して読み、準備してクラスに出席すること。		
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i> 各自で購入のこと。		
<参考書・参考資料等> R・ブルトマン著、杉原助訳『ヨハネの福音書』、2005年 R・A・カルペッパー著、伊東寿泰訳『ヨハネ福音書文学的解剖』2005年 R・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち』2011年 C.S. Keener, <i>The Gospel of John- A Commentary vol.1</i> , 2003.		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と期末試験（指定されたテキストについての釈義ペーパー [6,000～8,000文字]）。釈義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。レポートは共通評価指標（1）によって評価する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書原典釈義 I b	遠藤 勝信	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> ヨハネの黙示録 11：11～14：13までの原典釈義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。		
<到達目標> 学生が、新約聖書学の基礎（研究史、釈義の方法論）を修得し、テキストと真摯に向き合う姿勢を学ぶ。		
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ黙示録研究の動向（研究史、方法論）を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。		
<履修条件> 新約ギリシア語原典テキスト読解力を有すること。ギリシア語中級文法の知識があることが望ましい。		
<授業計画> I. 講義を中心に 第01回 インTRODクシヨン。黙示録の文学ジャンル。 第02回 黙示録を読む前に（その1）：黙示録の周辺、背景理解。 第03回 黙示録を読む前に（その2）：構造と構成、神学。 第04回 黙示録を読む前に（その3）：他。 第05回 黙示録1章～11章10節までを概観し、釈義の営みにおける課題と観点を確認する。 II. 演習（参加者による発表とディスカッション）を中心に 第06回 黙示録11：11～19の原典釈義 第07回 黙示録12：01～06の原典釈義 第08回 黙示録12：07～12の原典釈義 第09回 黙示録12：13～18の原典釈義 第10回 黙示録13：01～10の原典釈義 第11回 黙示録13：11～18の原典釈義 第12回 黙示録14：01～07の原典釈義 第13回 黙示録14：08～13の原典釈義 第14回 黙示録14：14～20の原典釈義 III. 総括 第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 クラスで取り上げる箇所のギリシア語テキストを十分読み、準備してクラスに出席すること。		
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i> 各自で購入のこと。		
<参考書・参考資料等> 佐竹明著『ヨハネの黙示録』（上・下巻）2009年 R・ボウカム著、飯郷友康・小河陽訳『ヨハネ黙示録の神学』2001年 R. Bauckham, <i>The Climax of Prophecy</i> , 1993. G. Beale, <i>The Book of Revelation</i> (NIGTC), 1999. D. Aune, <i>Revelation 6-16</i> (WBC), 1997.		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と期末試験（指定されたテキストについての釈義ペーパー [6,000～8,000文字]）。釈義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。レポートは共通評価指標（1）によって評価する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書原典釈義Ⅱ a	三永 旨従	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 山上の説教を中心にマタイによる福音書の中心的メッセージを模索していきます。		
<到達目標> 原典で新約聖書を読む力をつけると共に、マタイの神学的特徴を踏まえた上でマタイの教会論を論じることができるようになります。		
<授業の概要> 特に、旧約聖書並びにユダヤ教との関連を重視しつつ、山上の垂訓の原典の正確な講読を通して、その構造、中心的テーマを探っていきます。		
<履修条件> ギリシャ語1、2を修得済みの者。（聴講生も歓迎します。）		
<授業計画> 第1回 「嵐を鎮める奇跡」、「十字架」の箇所から見られるマタイの神学的特徴 第2回 「ペテロの信仰告白」の箇所の神学的特徴とマタイ的教会論 第3回 マタイ5：1～16の釈義 「幸い」とは何か 第4回 マタイ5：17～26の釈義 「律法と義」に関する問題 第5回 マタイ5：27～48の釈義 「禁止命令」について 第6回 マタイ5章の中心的用語の検討 第7回 マタイ6：1～18の釈義 「施し、祈り、断食」について 第8回 マタイ6：19～24の釈義 「富」に関して 第9回 マタイ6：25～34の釈義 「思い悩むな」について 第10回 マタイ6章の中心的用語の検討 第11回 マタイ7：1～12章の釈義 「求めなさい」について 第12回 マタイ7：13～23の釈義 「狭い門」とは 第13回 マタイ7：24～28の釈義 「家と土台」について 第14回 マタイ7章の中心的用語の検討 第15回 マタイ5～7章の構造に関する検討		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 学生各自が互いに共同し、協力しあってテキストの読みと神学的検討をしてください。		
<テキスト> ・Nestle-Aland, NOVUM TESTAMENTUM GRAECE (27版) に基づいた対観福音書（授業にて紹介します。） ・“A CONCORDANCE TO THE GREEK TESTAMENT: According to the Texts of Westcott and Hort, Tishendorf and the English Revisers” W.F. Moulton, A.S. Geden, T&T Clark. Ltd. (各自で購入することを強く勧めます。)		
<参考書・参考資料等> LXX (70人訳ギリシャ語旧約聖書)		
<学生に対する評価(方法・基準)> テキストへの積極的かつ、考察的取り組みを通して、マタイに対する理解を深められたかが、評価の基準となります。「共通評価指標(1)」によって評価します。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書原典釈義Ⅱb	三永 旨従	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 前期に引き続き、山上の説教を中心にマタイによる福音書の中心的メッセージを模索していきます。		
<到達目標> 前期の継続として原典で新約聖書を読む力をつけると共に、マタイの神学的特徴を踏まえた上でマタイの教会論を論じることができるようになります。		
<授業の概要> 前期に引き続き、旧約聖書並びにユダヤ教との関連を重視しつつ、山上の垂訓の原典の正確な講読を通して、その構造、中心的テーマを探っていきます。		
<履修条件> 「新約聖書原典釈義Ⅱa」を履修済みの者。（聴講生も歓迎します。）		
<授業計画> 第1回 第1回 マタイ5～7章の構造についての継続議論 第2回 マタイ5～7章全般に見られる特徴的用語の検討 第3回 マタイ5～7章に見られる「天」と「地」についての考察 第4回 マタイが独自に用いる「天国」と「地」との関連について 第5回 主の祈りの中心テーマ 第6回 「偽善」との戦いについての検討 第7回 マタイが独自に用いる「地名」と「地」について 第8回 マタイによる福音書全体から見た「天」と「地」についての考察 第9回 マタイ的教会論と「地」について 第10回 旧約のイザヤ書との関連 第11回 『インマヌエル・キリスト論』について 第12回 ヨシュア記と『インマヌエル・キリスト論』の関連について 第13回 ヨシュア記とマタイによる福音書の関連について 第14回 マタイ5～7章の中心をなすテーマについての考察 第15回 マタイ5～7章の中心的な神学についての考察		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 学生各自が互いに共同し、協力しあってテキストの読みと神学的検討をしてください。		
<テキスト> ・Nestle-Aland, NOVUM TESTAMENTUM GRAECE (27版) に基づいた対観福音書（授業にて紹介します。） ・“A CONCORDANCE TO THE GREEK TESTAMENT: According to the Texts of Westcott and Hort, Tishendorf and the English Revisers” W.F. Moulton, A.S. Geden, T&T Clark. Ltd.（各自で購入することを強く勧めます。）		
<参考書・参考資料等> LXX（70人訳ギリシャ語旧約聖書）		
<学生に対する評価（方法・基準）> テキストへの積極的かつ、考察的取り組みを通して、マタイに対する理解を深められたかが、評価の基準となります。「共通評価指標（1）」によって評価します。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
修士論文指導演習 新約神学 I	中野 実	<担当形態> 単教
後期・2単位	<登録条件>新約神学で修論を書く予定の学生	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ>来年度に修士論文を提出予定の、新約聖書神学専攻の大学院一年生のための演習で、論文テーマを探し出し、論文を書くために必要な力を身につけるためのクラス。		
<到達目標>適切な主題を各自が選定することができ、修士論文を書くための技術を身につけることができる。		
<授業の概要>論文を書くとはどういうことかを学びながら、各自その論文執筆を進めていく。毎回、学生の発表を中心に行われる。		
<履修条件>2024年9月に修論を提出予定の学生		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 論文を書くとは？ 第3回 各自の課題、問題探し。 第4回 その課題、問題に関連するテキスト探し。 第5回 課題テキストについての学び 第6回 テーマの選定、見直し、決定。 第7回 研究のための方法およびツールについて 第8回 資料、先行研究探し。 第9回 先行研究の学び 第10回 先行研究の学びとそこからの展開 第11回 問題設定：テーゼへ向かって 第12回 問題設定：テーゼの吟味 第13回 題名、目次作成へ向かって 第14回 議論の組み立て方 第15回 まとめ。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 上記の授業計画に基づきながら、各自論文作成を進めていく。そのために十分な時間を割くことが求められる。ただし、論文はモノログではないので、書物との対話はもちろん、教師、学生との対話も大切にすること。		
<テキスト>必要に応じて、指示する。		
<参考書・参考資料等>必要に応じて、指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）>共通評価指標（2）に基づきつつ、クラスへの出席、課題への積極的参加度などによって総合的に評価する。テーマの選定、課題テキストの学び、先行研究の学び、論文を書く技術を磨くことなどに関しても、十分な努力をしているかどうかの評価の指標となる。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
修士論文指導演習 新約神学Ⅱ	中野 実	<担当形態> 単教
前期・2単位	<登録条件>新約専攻の大学院2年生	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ>今年度前期末に修士論文を提出予定の学生のための演習で、毎回各自の研究内容を発表してもらいながら、研究状況を把握し、指導するためのクラスである。		
<到達目標>各自が修士論文を進めていくために必要な手助けが与えられ、論文を仕上げることができる。		
<授業の概要>論文の執筆段階における、各自の研究発表が中心に進められる。指導教授および参加学生の質問や意見を聞きつつ、論文を仕上げていく。		
<履修条件>2023年9月に新約聖書神学専攻で修士論文を提出予定の学生		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 問題設定の点検 第3回 資料の点検 第4回 題名、目次、議論の枠組みを整える。 第5回 より明確な問題設定の獲得 第6回 仮の序論の執筆 第7回 研究史に関する発表 第8回 研究史に学びつつ、そこからの展開 第9回 論文のテーゼの発見 第10回 論文のテーマの点検 第11回 議論の組み立て 第12回 議論の組み立ての点検 第13回 結論を書く。 第14回 論文のフォーマットの整理、注、文献表の作成 第15回 まとめ。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 上記の授業計画に基づきながら、各自論文執筆を進めていく。そのために十分な時間を割くことが求められる。ただし、論文はモノローグではないので、書物との対話はもちろん。教師、学生との対話も大切にすること。		
<テキスト>必要に応じて、適宜指示する。		
<参考書・参考資料等>必要に応じて、適宜指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）>共通評価指標（2）に基づきつつ、クラスへの出席、課題への積極的参加度などによって総合的に評価する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
組織神学特講Ⅱ a	須田 拓	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 学期毎の登録可	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 17世紀イングランドのピューリタン神学について、その論点と教義学的特徴とを概説する。		
<到達目標> 自由教会の起源と言ってもよいイングランド・ピューリタンの神学の概略を知り、日本の教会の伝統について考えることができる。		
<授業の概要> 17世紀イングランドのピューリタン神学について、組織神学の観点から講義する。いくつかのトピックを取り上げた上で、現代神学と比較し、現代神学に対する意義について考える。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 17世紀イングランドの教会と神学 第3回 救済論(1) アルミニウス主義と無律法主義 第4回 救済論(2) リチャード・バクスター（長老派）の場合 第5回 救済論(3) ジョン・オーウェン（会衆派）の場合 第6回 救済論(4) その他の神学者の場合 第7回 中間総括 第8回 三位一体論と聖霊論(1) ソツィーニ主義の主張 第9回 三位一体論と聖霊論(2) ジョン・オーウェンの場合 第10回 三位一体論と聖霊論(3) トマス・グッドウィン（会衆派）の場合 第11回 三位一体論と聖霊論(4) 急進的諸派の場合 第12回 教会論(1) 国教会体制の神学 第13回 教会論(2) ウェストミンスター会議の神学 第14回 教会論(3) 自由教会の神学 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 それぞれの項目について、宗教改革者や現代の神学者の基本的理解を確認しておく		
<テキスト> 特になし		
<参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> レポート（4,000字程度）によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標(1)に基づいて評価する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
組織神学特講Ⅱb	須田 拓	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 学期毎の登録可	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 予定論の諸相を学ぶことを通して、現代神学の議論に触れ、深い教義学の理解を持つことを目指す。		
<到達目標> 予定論について、現代神学にどのような議論があるのかを知り、自ら考えることができるようになる。		
<授業の概要> 予定論について講義する。論点を整理した上で、現代の様々な神学者の議論を概観し、あるべき予定論の姿を模索する。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 神学史における予定論 アウグスティヌスとカルヴァン、カルヴィニズムを中心に 第3回 予定論の論点(1) 選びと人間の自由 第4回 予定論の論点(2) 選びと三位一体 第5回 予定論の論点(3) 個人か集団か 第6回 選びと人間の自由(1) カール・バルトにおける恵みの選び 第7回 選びと人間の自由(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第8回 選びと人間の自由(3) コリン・ガントンの場合、その他の神学者の場合 第9回 中間総括 第10回 選びと三位一体(1) カール・バルトの場合 第11回 選びと三位一体(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第12回 選びと三位一体(3) その他の神学者の場合 第13回 選びと教会(1) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第14回 選びと教会(2) ロバート・ジェンソンの場合、コリン・ガントンの場合 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 前回までの復習をした上で、授業で扱われるテーマについて、自分なりの考えをまとめてみる		
<テキスト> 特になし		
<参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する		
<学生に対する評価（方法・基準）> レポート（4,000字程度）によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標(1)に基づいて評価する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
組織神学演習Ⅱ a	神代 真砂実	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 特になし。	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校・高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 組織神学の代表的文献であるカール・バルトの『教会教義学』の精読を通して、組織神学的思考を養う。また、20世紀の代表的神学者であるバルトの神学思想の特色について基本的な事柄を理解する。		
<到達目標> ①高度な神学書の読解力を身に着ける。②バルトの神学的思惟の特徴を理解する。③バルトを通して教義学の特定の課題についての総合的な理解を身に着ける。		
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から和解論（第一部）の聖霊論・教会論・信仰論にあたる部分（62・63節）を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。		
<履修条件> 難しい学びに挑戦し、自分の可能性を広げようとする意欲を持っていること。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 テキスト、3～16頁（62節 1. 聖霊の業） 第3回 同、17～34頁（62節 2. 教団の存在①） 第4回 同、35～48頁（同②） 第5回 同、48～79頁（同③） 第6回 同、79～94頁（同④） 第7回 同、94～110頁（同⑤） 第8回 同、110～129頁（同⑥） 第9回 同、129～152頁（同⑦） 第10回 同、153～178頁（62節 3. 教団の時） 第11回 同、179～196頁（63節 1. 信仰とその対象①） 第12回 同、196～212頁（同②） 第13回 同、213～220頁（63節 2. 信仰の行為①） 第14回 同、220～247頁（同②） 第15回 同、247～254頁（同③）		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。演習なので、必ずテキストをよく読んでから出席すること。		
<テキスト> カール・バルト、『教会教義学・和解論Ⅰ／4 僕としての主イエス・キリスト 下』、井上良雄訳（新教出版社、オンデマンド）。		
<参考書・参考資料等> 授業の中で適宜、紹介する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度（30%）および小課題（70%）による。共通評価指標（1）に準拠して評価する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
組織神学演習Ⅱb	神代 真砂実	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 特になし。	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校・高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 前期と同じ。		
<到達目標> 前期と同じ。		
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から和解論（第二部）の「人の子の高挙」（64節）の前半を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。		
<履修条件> 前期と同じ。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション、およびテキスト、3～17頁（64節 1. 和解論の別の問題①） 第2回 テキスト、17～33頁（同、②） 第3回 同、34～53頁（64節 2. 人の子の帰郷①） 第4回 同、53～63頁（同②） 第5回 同、63～88頁（同③） 第6回 同、88～107頁（同④） 第7回 同、107～129頁（同⑤） 第8回 同、129～150頁（同⑥） 第9回 同、150～169頁（同⑦） 第10回 同、169～187頁（同⑧） 第11回 同、187～211頁（同⑨） 第12回 同、211～232頁（同⑩） 第13回 同、232～253頁（同⑪） 第14回 同、253～278頁（同⑫） 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 他は前期と同じ。		
<テキスト> カール・バルト、『教会教義学・和解論Ⅱ／1 主としての僕イエス・キリスト 上〈1〉』、井上良雄訳（新教出版社、オンデマンド）。		
<参考書・参考資料等> 授業の中で適宜、紹介する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度（30%）および小課題（70%）による。共通評価指標（1）に準拠して評価する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
組織神学演習Ⅲ a	芳賀 力	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 通年の登録が望ましいが、片学期でも可。	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 公共的真理としての福音は、啓蒙主義以降の世俗化した近代社会にあつて私的な事柄に成り下がっている。どうしたらもう一度福音の権威を取り戻すことができるのか、その方途を探る。		
<到達目標> 世俗化した文化の中にあつても、確信を持って福音的真理を宣べ伝えることのできる力を身に着ける。		
<授業の概要> 分担してテキストの要約を発表し、提示されたコメントを手がかりに全員で議論する。		
<履修条件> 組織神学専攻以外の人でも履修することができる。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 L.Newbigin『ギリシャ人には愚かなれど』 第1章 第3回 同上 第2章 第4回 同上 第3章 第5回 同上 第4章 第6回 同上 第5章 第7回 同上 第6章 第8回 L.Newbigin『宣教学入門』 第1章、第2章 第9回 同上 第3章 第10回 同上 第4章 第11回 同上 第5章、第6章 第12回 同上 第7章 第13回 同上 第8章 第14回 同上 第9章 第15回 同上 第10章		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 担当に当たっていない場合でも、前もって目を通しておくこと。		
<テキスト> L.Newbigin『ギリシャ人には愚かなれど』新教出版社、2007年。同『宣教学入門』日本基督教団出版局、2010年。教員がコピーを順次用意する。		
<参考書・参考資料等> 必要に応じて授業内で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 学期末にレポートを提出する。共通評価指標（1）のうち、特に②と④に基づいて評価する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
組織神学演習Ⅲb	芳賀 力	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 通年の登録が望ましいが、片学期でも可。	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> ポスト・キリスト教時代にあつて、キリスト者は「寄留の外国人」であるが、そのような中で、公共の真理としての福音を物語る聖書の民の使命と課題について考える。		
<到達目標> 非キリスト教的な文化の中にあつても、確信を持って福音的真理を宣べ伝えることのできる力を身に着ける。		
<授業の概要> 分担してテキストの要約を発表し、提示されたコメントを手がかりに全員で議論する。		
<履修条件> 組織神学専攻以外の人でも履修することができる。		
<授業計画>		
第1回	S.Hauerwas『平和を可能にする神の国』	第1章
第2回	同上	第2章
第3回	同上	第3章
第4回	同上	第4章
第5回	同上	第5章
第6回	同上	第6章
第7回	同上	第7章
第8回	同上	第8章
第9回	S.Hauerwas/W.H.Willimon『旅する神の民』	第1章
第10回	同上	第2章
第11回	同上	第3章
第12回	同上	第4章
第13回	同上	第5章
第14回	同上	第6章
第15回	同上	第7章
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 担当に当たっていない場合でも、前もって目を通しておくこと。		
<テキスト> S.Hauerwas『平和を可能にする神の国』新教出版社、1992年。同『旅する神の民』教文館、1999年。 教員がコピーを順次用意する。		
<参考書・参考資料等> 必要に応じて授業内で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 学期末にレポートを提出する。共通評価指標（1）のうち、特に②と④に基づいて評価する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
信条学	芳賀 力	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>前期のみ開講	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 歴史的教会の生み出した諸信条の特色を学ぶ。また教義学の項目に沿って、直接信条の神学を学ぶ。		
<到達目標> 授業の前半で古代教会の基本信条および宗教改革期以後の代表的な信条の特色を身に着ける。授業の後半でロールスのテキストを通して歴史的諸信条を教義学的に考察し、その神学的意味を体系的に身に着ける。		
<授業の概要> 授業前半は資料を配付し、講義を行う。後半は担当者を決め、教義学の主題ごとに要約し、コメントしてもらう。		
<履修条件> 大学院博士課程前期・後期に在籍している者は誰でも履修できる。		
<授業計画> <p>第1回：信条・信仰告白とは何かを押さえた上で、使徒信条を学ぶ。</p> <p>第2回：ニケア・コンスタンティノポリス信条を学ぶ。またロールスのテキスト「啓示、神の言葉、伝統」の項目を読む。</p> <p>第3回：アタナシオス信条を学ぶ。またロールスのテキスト「神の本性と三位一体論」の項目を読む。</p> <p>第4回：カルケドン信条を学ぶ。またロールスのテキスト「創造と摂理」の項目を読む。</p> <p>第5回：ルター大・小教理問答を学ぶ。またロールスのテキスト「人間と罪」の項目を読む。</p> <p>第6回：アウグスブルク信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「恵みの契約と和解」の項目を読む。</p> <p>第7回：ジュネーヴ教会信仰問答を学ぶ。またロールスのテキスト「キリスト論とカルヴァン主義的な外部」の項目を読む。</p> <p>第8回：フランス信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「義認と信仰」の項目を読む。</p> <p>第9回：第一・第二スイス信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「聖化と悔改め」の項目を読む。</p> <p>第10回：スコットランド信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「選びと棄却」の項目を読む。</p> <p>第11回：ハイデルベルク信仰問答を学ぶ。またロールスのテキスト「教会とそのしるし」の項目を読む。</p> <p>第12回：ドルト信仰規準を学ぶ。またロールスのテキスト「御言葉と聖礼典」の項目を読む。</p> <p>第13回：ウェストミンスター信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「神の言葉の二様態」の項目を読む。</p> <p>第14回：バルメン宣言を学ぶ。またロールスのテキスト「洗礼」の項目を読む。</p> <p>第15回：日本基督教団信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「聖餐」の項目を読む。</p>		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 教室で渡す資料をよく整理し、保存しておくこと。担当者はテキストを丹念に読むこと。		
<テキスト> J・ロールス『改革教会信仰告白の神学』一麦出版社、2009年。研究室にて割引価格で頒布する。		
<参考書・参考資料等> 必要に応じて授業の中で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 共通評価指標(1)に基づいて評価する。学期末に自分の発表した箇所を基にレポートを提出する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
修士論文指導演習 組織神学 I	神代 真砂実	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 狭義の組織神学および実践神学の分野で修士論文を執筆する予定の者。	
教職課程における要件・区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 修士論文執筆のために必要な技能を学ぶこと、および、修士論文の準備をすること。		
<到達目標> ①組織神学の論文を書くとはどういうことか、そのために必要な技能や作業は何か、を身に着けること。②修士論文執筆に備えての基礎的準備作業（主要文献の読解等）を終えること。		
<授業の概要> 前半では主に論文執筆の過程を学ぶ。後半では各自の修士論文の準備を進めて貰い、順番に報告・発表して貰う。		
<履修条件> 2024年度に修士論文提出予定の者は必修。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション——論文の基本的要件 第2回 発表①：各自の論文の主題について 第3回 論文作成の技法①：テキストの分析——全体的な内容の把握 第4回 論文作成の技法②：テキストの分析——構成を把握する 第5回 論文作成の技法③：テキストの分析——書き方を考える 第6回 論文作成の技法④：主題の決定・文献探しについて 第7回 論文作成の技法⑤：リサーチ・主張（テーゼ）の発見・目次の検討 第8回 論文作成の技法⑥：パラグラフ 第9回 発表②：修士論文の主題と文献について（1） 第10回 発表③：同（2） 第11回 発表④：内容の構想について（1） 第12回 発表⑤：内容の構想について（2） 第13回 発表⑥：内容の構想について（3） 第14回 発表⑦：修士論文の主題と文献表と基本構想（1） 第15回 発表⑧：同（2）		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。授業をきちんと受けること・自分の研究を着実に進めること。		
<テキスト> 担当者が用意するプリント。		
<参考書・参考資料等> 泉忠司、『90分でコツがわかる！ 論文&レポートの書き方』（青春出版社）；小熊英二、『基礎からわかる論文の書き方』（講談社現代新書）。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度および発表による。主に共通評価指標（2）の①と②によって評価する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
修士論文指導演習 組織神学Ⅱ	神代 真砂実	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 狭義の組織神学および実践神学の分野で修士論文を執筆する予定の者。	
教職課程における要件・区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 修士論文の作成にあたり、適切な内容と形式について学ぶ。		
<到達目標> 修士論文を完成・提出すること。		
<授業の概要> 各自の学びの成果を順に報告して貰うことで内容を検討すると共に、論文の体裁を持つ短い文章を書いて貰いながら、形式面での基本的技法を学ぶ。		
<履修条件> 2023年9月に狭義の組織神学および実践神学の分野で修士論文を提出予定の者は必修。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション——修士論文の基本的要件の確認 第2回 各自の論文の主題と文献について① 第3回 各自の論文の主題と文献について② 第4回 各自の論文の主題と文献について③ 第5回 主要文献の読書報告① 第6回 主要文献の読書報告② 第7回 主要文献の読書報告③ 第8回 二次文献から学んだことについての報告① 第9回 二次文献から学んだことについての報告② 第10回 二次文献から学んだことについての報告③ 第11回 主張（テーゼ）と目次と内容の構想について① 第12回 主張（テーゼ）と目次と内容の構想について② 第13回 主張（テーゼ）と目次と内容の構想について③ 第14回 主張（テーゼ）と目次と内容の構想について④ 第15回 形式面の確認・提出の要領について		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。最大限の時間と能力とを傾注すること。		
<テキスト> 特になし。		
<参考書・参考資料等> 佐渡島紗織・坂本麻裕子・大野真澄編著、『レポート・論文をさらによくする「書き直し」ガイド——大学生・大学院生のための自己点検法 29』（大修館書店、2019年）。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表による。修士論文用の共通評価指標（2）を参照して評価する。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
教理史演習Ⅱ a	本城 仰太	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 特になし	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 西方教会における信条の連続性と変化を学ぶ。		
<到達目標> 使徒信条成立史をたどりながら、教会の最初期の時代から中世の時代までの信条の連続性と変化を概観することができるようになる。また、史料を用いる力を養い、関連する教理を論じられるようになる。		
<授業の概要> 毎回のテーマに関連するレジュメと史料を配布しての講義、学生による発表（一人当たり 1～2回）、ディスカッションを行う。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 ガイダンス、信条（symbolum）とは？ 第2回 聖書から信条へ 第3回 洗礼信条、信条の伝達（traditio）と復唱（redditio） 第4回 教父たちによる信仰の基準（regula fidei） 第5回 教会会議での信条（アレオス論争とニカイア信条を中心に） 第6回 礼拝の中での信条（第三回トレド教会会議を中心に） 第7回 古ローマ信条（R）の発見、「自由主義神学」による信条研究 第8回 ヒッポリュトス『使徒伝承』と古ローマ信条（R）以前の信条 第9回 古ローマ信条（R）から地域信条への発展① 北イタリア型（異端対策のための付加） 第10回 古ローマ信条（R）から地域信条への発展② アフリカ型（「聖なる教会を通して」） 第11回 古ローマ信条（R）から地域信条への発展③ ガリア型（「聖霊によって宿り」） 第12回 「使徒信条」（symbolum apostolorum）の名称と使徒信条の伝説 第13回 信条の統一化の波（フィリオクエ論争とアタナシウス信条） 第14回 カール大帝による使徒信条としての標準化と西方教会での統一化 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 教会史Ⅰ～Ⅱの関連する事柄や史料をよく復習しておくこと。		
<テキスト> 特になし。必要な史料は授業中に配布、または指示する。		
<参考書・参考資料等> ケリー『初期キリスト教信条史』（服部修訳、一麦出版社、2011年）		
<学生に対する評価（方法・基準）> 講義の出席を前提とし、①授業での議論への積極的な参加、②授業での発表、③期末レポートによって、共通評価指標（1）に基づいて総合的に評価する。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
教理史演習Ⅱ b	本城 仰太	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 特になし	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 東方教会における信条の連続性と変化を学ぶ。		
<到達目標> 古代から中世までの東方の七つの公会議（西方とも共通）での協議内容や決定事項をたどりながら、信条の連続性と変化を概観することができるようになる。また、史料を用いる力を養い、関連する教理を論じられるようになる。		
<授業の概要> 毎回のテーマに関連するレジュメと史料を配布しての講義、学生による発表（一人当たり 1～2回）、ディスカッションを行う。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 ガイダンス、信条と信仰告白の定義 第2回 エウセビオス『教会史』における「信仰」と「職制」 第3回 第一回ニカイア公会議（325年）における信条の連続性と変化 第4回 第二回コンスタンティノポリス公会議（381年）における信条の連続性と変化 第5回 エフェソ公会議（431年）における信条の連続性と変化 第6回 カルケドン公会議（451年）における信条の連続性と変化 第7回 第二回コンスタンティノポリス公会議（553年）における信条の連続性と変化 第8回 第三回コンスタンティノポリス公会議（680-81年）における信条の連続性と変化 第9回 第二回ニカイア公会議（787年）における信条の連続性と変化 第10回 教父思想の連続性と変化 第11回 三位一体の教理の連続性と変化 第12回 聖霊の教理の連続性と変化 第13回 キリストの位格の連続性と変化 第14回 信条の変化と「伝達」 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 教会史Ⅰ～Ⅱの関連する事柄や史料をよく復習しておくこと。また配布テキストをよく読んでおくこと。		
<テキスト> J. Pelikan, <i>Credo: Historical and Theological Guide to Creeds and Confessions of Faith in the Christian Tradition</i> , New Haven and London: Yale University Press, 2003の第一章（Continuity and Change in Creeds and Confessions）（初回の授業で訳を配布する）。その他必要な史料は授業中に配布、または指示する。		
<参考書・参考資料等> ケリー『初期キリスト教信条史』（服部修訳、一麦出版社、2011年）		
<学生に対する評価（方法・基準）> 講義の出席を前提とし、①授業での議論への積極的な参加、②授業での発表、③期末レポートによって、共通評価指標（1）に基づいて総合的に評価する。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
教会史特講Ⅱ a	藤本 満	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> ウェスレーの生涯、メソジスト運動の概要を理解する。		
<到達目標> 18世紀信仰復興運動のプロテスタント史における位置づけ、現代的意義を確認する。		
<授業の概要> ウェスレーに流れ込んだ思想的・信仰的背景を学び、信仰復興運動を指導し、やがてメソジスト教会、それと分岐するホーリネス運動、日本のメソジスト教会の歴史、現代のメソジスト教会の関心事に注目する。		
<履修条件>		
<授業計画> 第1回 イギリス宗教改革の特色 第2回 17世紀アングリカンモラリズムとピューリタニズム 第3回 ドイツ敬虔主義と啓蒙主義 第4回 オックスフォードメソジスト 第5回 ジョージア宣教と挫折 第6回 アルダスゲイト体験の意義 第7回 野外説教とメソジスト運動 第8回 信仰復興運動 その1 英米のリバイバルの特質 第9回 信仰復興運動 その2 賛美と霊性 第10回 「全き聖化」のリバイバル 第11回 メソジスト伝道者像 第12回 カリスマ指導者の死 第13回 教会化と19世紀ホーリネス運動 第14回 日本メソジスト教会 第15回 世界のメソジストの動向		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 指定された資料を読む・ゼミ形式のディスカッションが求められる		
<テキスト> 藤本満『ウェスレーの神学』（Amazon, Kindle版）各自で購入のこと（絶版であるが、中古で紙の本を手に入れることも可能）。		
<参考書・参考資料等> 藤本満『わたしたちと宗教改革』（第一巻：歴史）日本基督教団出版局		
<学生に対する評価（方法・基準）> 1. 授業における討論への積極的参加 2. ウェスレーの生涯における出来事を一つ取り上げ、彼の生涯とメソジストへの意義を論じる。 （A4用紙、40字×30行×3枚程度） 評価にあたっては、共通評価指標（1）①、③の内容を重視する。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
教会史特講Ⅱ b	藤本 満	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> ウェスレーの神学を理解し、現代の教会に当てはめる。		
<到達目標> ウェスレー神学の全体像と主要な各論を習得する。		
<授業の概要> 一次資料を用いながら、ウェスレー神学に特色ある項目を学び、宗教改革者・啓蒙主義・東方教父などと比較研究を試みることで、ウェスレー神学の公同性と独自性を学ぶ。		
<履修条件>		
<授業計画> 第1回 先行の恵み（人間論） 第2回 信仰義認 第3回 救いの確証 第4回 選びの教理をめぐっての論争 第5回 聖化その1 論争 第6回 聖化その2 心と生活 第7回 キリスト者の完全 第8回 最後の義認 第9回 教会論 第10回 サクラメント 第11回 ウェスレーとルター 第12回 ウェスレーとカルヴァン 第13回 ウェスレーと啓蒙主義 第14回 ウェスレーと東方教会 第15回 ウェスレー解釈をめぐって		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 指定された資料を読む・ゼミ形式のディスカッションが求められる		
<テキスト> 藤本満『ウェスレーの神学』（Amazon, Kindle版）各自で購入のこと（絶版であるが、中古で紙の本を手に入れることも可能）。		
<参考書・参考資料等> 藤本満『わたしたちと宗教改革』（第一巻：歴史）日本基督教団出版局		
<学生に対する評価（方法・基準）> 1. 授業における討論への積極的参加 2. ウェスレー神学の一項目を取り上げて、論じる。（A4用紙、40字×30行×4枚程度） 評価にあたっては、共通評価指標（1）①、③の内容を重視する。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
修士論文指導演習 歴史神学 I	本城 仰太	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 歴史神学の分野で修士論文を提出する予定の学生	
教職課程における要件・区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 来春から本格的に修士論文に取り組めるように、修士論文のプロセスを一通り体験する。		
<到達目標> 来春から本格的に修士論文に取り組むための力を身に着ける。		
<授業の概要> 修士論文を書いていくためのプロセスを体験する演習を行う。クラスで共通のテーマを設定し、分担して史料の発表を行い、ディスカッションをしながら、論文を書いていくための素材を整えていく。最終的に各自が共通のテーマに関する学期末レポートを書く。		
<履修条件> 歴史神学の分野で修士論文を提出する予定の学生は必修。		
<授業計画> 第1回 歴史神学とは、神学的テーマの設定方法 第2回 演習：テーマを設定する 第3回 修論テーマ案発表① 第4回 修論テーマ案発表② 第5回 演習：史料を探す 第6回 演習：事典・辞書を調査する 第7回 演習：一次史料①を読む 第8回 演習：一次史料②を読む 第9回 演習：一次史料③を読む 第10回 演習：二次史料①を読む 第11回 演習：二次史料②を読む 第12回 演習：二次史料③を読む 第13回 演習：アウトラインを整える 第14回 演習：注と参考文献を整える 第15回 総括		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 『論文の書き方』を復習しておくこと。		
<テキスト> 澤田昭夫『論文の書き方』（講談社学術文庫153）1977年		
<参考書・参考資料等> J.H.アーノルド『歴史』（新広記訳、岩波書店）、N.F.Cantor, R.I.Schneider, How to Study History. 他		
<学生に対する評価（方法・基準）> 講義の出席を前提とし、①授業での議論への積極的な参加、②授業での発表、③期末レポートによって、共通評価指標（2）に基づいて総合的に評価する。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
修士論文指導演習 歴史神学Ⅱ	本城 仰太	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 歴史神学の分野で修士論文を提出する予定の学生	
教職課程における要件・区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 修士論文の執筆に取り組んでいく。		
<到達目標> 修士論文を作成し、提出する。		
<授業の概要> 修士論文のテーマ設定、史料探しを行い、一次史料・二次史料を読み、アウトラインや注と参考文献を整えつつ、修士論文を書いていく。学生による数回の発表とクラスでのディスカッションを行っていく。		
<履修条件> 歴史神学の分野で修士論文を提出する予定の学生は必修。		
<授業計画> 第1回 歴史神学とは、神学的テーマの設定 第2回 テーマに関する発表① 第3回 テーマに関する発表② 第4回 テーマに関するディスカッション 第5回 史料に関する発表① 第6回 史料に関する発表② 第7回 史料に関するディスカッション 第8回 一次史料に関する発表① 第9回 一次史料に関する発表② 第10回 一次史料に関するディスカッション 第11回 二次史料に関する発表① 第12回 二次史料に関する発表② 第13回 二次史料に関するディスカッション 第14回 アウトライン、注と参考文献に関する発表 第15回 アウトライン、注と参考文献に関するディスカッション		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。発表を繰り返していくので、指摘事項を受けとめて次の発表に備えること。		
<テキスト> 澤田昭夫『論文の書き方』（講談社学術文庫153）1977年		
<参考書・参考資料等> 特になし。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 講義の出席を前提とし、①授業での議論への積極的な参加、②授業での発表によって、共通評価指標（2）に基づいて総合的に評価する。		

組織神学専攻・実践神学関係		
キリスト教教育特講 a	長山 道	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校・高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に定める科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> キリスト教教育の古典的な文献を読み、今日の教会や学校における実践に生かすことを目指す。		
<到達目標> 神学書を読み、神学的に考える力を身につける。アウグスティヌスの教育思想の特徴を理解し、現代の課題との関連で考察できるようになる。		
<授業の概要> キリスト教教育の古典的なテキストを精読し、担当者の講義により理解を深め、議論することを通して、今日のキリスト教教育のあり方を考察する。		
<履修条件>		
<授業計画> 第1回 いちばん重要なことは、教理を教える人が喜びの心をもって教えるには、どうすればよいかということです 第2回 キリストが来られたのは、神がどれほど人を愛しておられるかということを知らせるためでした。この愛の招きに応じましょう 第3回 愛という目的をめざして、世界創造から現代にいたるまでの歴史について話さなければならない 第4回 高等教育を受けた人々の取り扱い方 第5回 倦怠感の起こる六つの原因 第6回 原因を取り除く方法 第7回 聴衆の多様性に従って、話は変わってくる 第8回 真の安息 第9回 世の七つの時代 第10回 創造と原罪 第11回 この世の教会 第12回 教会の始まり 第13回 勧告のことば 第14回 求道者の入会の式 第15回 預言の成就		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 テキストの指定された箇所を熟読してくる。不明な点は調べておくこと。		
<テキスト> アウグスティヌス（熊谷賢二訳）『教えの手ほどき』、創文社、1993年。担当者が用意する。		
<参考書・参考資料等> 授業内で適宜指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> ディスカッションによって、共通評価指標(1)①～③に基づき評価する。		

組織神学専攻・実践神学関係		
キリスト教教育特講 b	長山 道	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校・高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に定める科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 現代アメリカのキリスト教教育学を代表する文献を読み、今日の教会における教育に生かすことを目指す。		
<到達目標> 神学書をクリティカルに読みこなす力、神学的に考える力を身につける。キリスト教教育学の根本問題を理解し、現代の課題との関連で考察できるようになる。		
<授業の概要> キリスト教教育学の標準的なテキストを精読し、理解を深め、議論することを通して、今日の教会教育のあり方を考察する。		
<履修条件>		
<授業計画> 第1回 嘆き 第2回 適応課題の提言 第3回 共同体が教育に与える影響 第4回 教育の目的 第5回 教育エージェンシー 第6回 何が起こったのか？ 第7回 信仰を形成するカテキズム的文化の喪失 第8回 説得力ある神の物語の喪失 第9回 なぜ思い起こせないのか 第10回 習慣的实践学習への挑戦 第11回 カテキズム的文化としての教会 第12回 祝祭行事の実践 第13回 教会的対話の実践 第14回 アダプティブ・チェンジと教育的イマジネーション 第15回 教会生活における教育的イマジネーション		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 テキストの指定された箇所を熟読してくる。不明な点は調べておくこと。		
<テキスト> チャールズ・フォスター（伊藤悟訳）『世代から世代へ 教会における信仰形成教育の適応課題』、教文館、2022年。 学生各自で購入する。		
<参考書・参考資料等> 授業内で適宜指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> ディスカッションによって、共通評価指標(1)①～③に基づき評価する。		

組織神学専攻・実践神学関係		
実践神学演習 a	小泉 健	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 前期は加藤常昭『文学としての説教』をテキストにし、わたしたちの説教について考察する。		
<到達目標> テキストそのものの理解にとどまらず、説教をよりよく受け取るための視野、観点を身に着けること。		
<授業の概要> 毎回発表担当者が割り当てられた箇所についての要約とコメントをし、その上で討論を行う。		
<履修条件>		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 説教の「文学性」 第2回 「第一章 文学パースペクティヴの再発見」の「一」 第3回 同上の「二」、「三」 第4回 同上の「四」 第5回 「第二章 文学としての聖書・文学としての説教」 第6回 「第三章 文学としての説教の可能性と必然性」の「一」 第7回 同上の「二」 第8回 同上の「三」 第9回 同上の「四」 第10回 同上の「五」、「六」 第11回 「第四章 文学との対話に生きる説教者」 第12回 「第五章 文学的説教を読む」の「一」 第13回 同上の「二」 第14回 「暫定的結語・文学としての説教」 第15回 わたしたちの説教を考える		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 必ず事前にテキストを読み、質問やコメントを用意してくること。		
<テキスト> 加藤常昭『文学としての説教』日本キリスト教団出版局、2008年 各自で購入のこと。		
<参考書・参考資料等>		
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表、討論への参加によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標（1）の全体による。		

組織神学専攻・実践神学関係		
実践神学演習 b	小泉 健	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 後期は加藤常昭『慰めのコイノーニア』をテキストにし、わたしたちの牧会について考察する。		
<到達目標> テキストの問題提起を受け止め、実際の牧会に基づきつつ、牧会への理解を深めること。		
<授業の概要> 毎回発表担当者が割り当てられた箇所についての要約とコメントをし、その上で討論を行う。		
<履修条件>		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 牧会を考える 第2回 第1章 慰めのコイノーニア・教会 第3回 第2章 慰めの諸相 第4回 第3章 ハイデルベルク信仰問答に聴く 第5回 第4章 慰めの対話 第6回 第5章 何を語り合うのか その一 第7回 第6章 天国の鍵 第8回 第7章 何を語り合うのか その二 第9回 第8章 主イエスを愛する群れを 第10回 第9章 慰めの言葉を求めて 第11回 第10章 嘆きの声を挙げる教会 第12回 第11章 九日間の祈り 第13回 第12章 クリストクラシー 第14回 第13章 足腰の強い慰めを 第15回 第14章 名札をつけて		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 必ず事前にテキストを読み、質問やコメントを用意してくること。		
<テキスト> 加藤常昭『慰めのコイノーニア 牧師と信徒が共に学ぶ牧会学』日本キリスト教団出版局、2012年 各自で購入のこと。		
<参考書・参考資料等>		
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表、討論への参加によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標（1）の全体による。		

組織神学専攻・実践神学関係		
キリスト教教育特研 a	朴 憲郁	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>特になし	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> キリスト教教育学の諸相を学ぶ。		
<到達目標> 20世紀キリスト教教育学の経緯を考察した後、自らその今日的意義を見出す。		
<授業の概要> 前世紀にキリスト教教育学が辿った諸局面を開示し、宗教多元化社会における神学的把握、戦後日本の宗教教育の問題を的確に捉えること、及び教育実践的展開の一例として、ティリッヒの<象徴教授法>を学ぶ。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画>		
第1回	20世紀キリスト教教育学の経緯と今日の動向ードイツ神学の脈絡において 20世紀における二大変遷 1. 弁証法神学に基づく教育思想	
第2回	2. 新たなキリスト教教育学の台頭 (1) 「宗教教育学」の神学的基礎づけ	
第3回	(2) 1970年代の新たな問題設定（視点の転換）ー共に生き、信じることを学ぶ (3) 象徴教授法ーP. ビールの理論（第1巻、第2巻）	
第4回	キリスト教教育学的問題としての福音と宗教 1. キリスト教教育学と組織神学との関係 2. 福音と世俗化世界との関係を巡ってーゴールテンの世俗化命題 3. シュタルマンにおける「ゴールテンの世俗化命題」の受容と教育学的展開	
第5回	4. キリスト教教育における福音と宗教の関係 (1) エーベリングとキリスト教教育、(2) 宗教授業の対象領域 (第3回から14回まで受講者が発表し、討論とコメントをする)	
第6回	世俗化命題に代わる象徴理論ー再びP. ビール (1) (2) (3)	
第7回	多宗教社会におけるキリスト教教育学の課題 キリスト教が他宗教を主題化する動機と型	
第8回	諸宗教の世界ー神学的把握	
第9回	学校における宗教教育、戦後日本の宗教教育の問題 (1) (2) (3) (4)ー諸宗教間の共存から競合へ	
第10回	今日の「象徴」教授法ーティリッヒの「宗教的象徴」を手がかりに（象徴理論への関心）	
第11回	ティリッヒにおける宗教言語としての象徴の理論、E. ユンゲルの見解への一瞥	
第12回	象徴の神学ー聖書的・キリスト教的諸象徴、その他ー	
第13回	象徴教授法 (1) 真正な象徴への接近、(2) 象徴と経験	
第14回	象徴教授法 (3) 1980年代以降の象徴教授法の諸展開（要請される象徴教授法、その他）	
第15回	全体的反省と総括	
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 全員、事前にテキストの当該箇所を目を通してディスカッションできる備えをする。		
<テキスト> 朴 憲郁 『現代キリスト教教育学研究ー神学と教育の間でー』 日本キリスト教団出版局、2020年8月 テキストは学生各自が購入。		
<参考書・参考資料等> 授業の中で随時紹介する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業時の発表、討論への参加度、および期末レポート（4,000字程度）によって評価する。 2/3以上の授業出席者を評価の対象とする。共通評価指標（1）の①～④の内容を重視する。		

組織神学専攻・実践神学関係		
キリスト教教育特研 b	朴 憲郁	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>特になし	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> キリスト教教育学の諸相を学ぶ。		
<到達目標> 現代のキリスト教教育学の重要な諸テーマを学ぶことにより、その実践的適応を模索する。		
<授業の概要> 今日の「家族」に対するキリスト教教育学的な考察、子どもの信仰の形成、聖書的基础づけによる平和教育、信仰と教育の関係、信仰継承の意味と諸相を取り上げる。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 今日の「家族」に対するキリスト教教育学的な考察—一般的考察 第2回 家族と宗教の関係—歴史の変遷 第3回 今日の家族状況におけるキリスト教教育の可能性、家族と信仰・教会との関係 第4回 家族のためのキリスト教教育学的モデル 第5回 福音による変革と形成— 1. 子どもの信仰—離別かモデルか (1) (2) (3) (4) (5) (6) 第6回 2. 幼少期と老年期における知恵 第7回 3. 平和と暴力—平和の旧新約聖書的基础づけ (1) (2) (3) 第8回 コメニウスの平和教育論 (extra) (参考書参照) 第9回 信仰と教育 1. 聖書の信仰と子どもの尊重 (1) (2) 第10回 2. 宗教改革の見解—信仰の非教授性と学習の必要性 (1) (2) (3) (4) (5) 第11回 信仰継承の意味と諸相 1. 「信仰継承」の否定的意味 (1) (2) (3) 第12回 1. 「信仰継承」の積極的意味 (1) (2) 第13回 教会における信仰継承 (1) (2) 第14回 全体的反省 第15回 全体的総括		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 全員、事前にテキストの当該箇所を目を通してディスカッションできる備えをする。		
<テキスト> 朴 憲郁 『現代キリスト教教育学研究—神学と教育の間で—』 日本キリスト教団出版局、2020年8月 J.H. ウェスターホフ、『子どもの信仰と教会』—教会教育の新しい可能性 新教出版、1998年(2版) J.L. シーモア編 『キリスト教教育の現代的展開』、第3章:Ch. R. フォスター 「キリスト教教育と信仰共同体」 新教出版社、1987年 テキストは学生各自が購入。		
<参考書・参考資料等> ・授業の中で随時紹介する。 ・朴憲郁、「コメニウスの平和教育のヴィジョン」 上野峻一・田中かおる 編著 『恵みによって生きる人間の形成』—キリスト教教育の理論と実践— <朴憲郁先生献呈論文集> 日本キリスト教団出版局、2018年3月 197～210頁		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業時の発表、討論への参加度、および期末レポート（4,000字程度）によって評価する。 2/3以上の授業出席者を評価の対象とする。共通評価指標（1）の①～④の内容を重視する。		

組織神学専攻・実践神学関係		
臨床牧会教育 a	ウェイン・ジャンセン	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	該当せず	
<授業のテーマ> 病院での実習により、牧会的な心得を身につけること。		
<到達目標> 自分の牧会者像を明確にする。		
<授業の概要> 吉祥寺病院（精神科）を実習のフィールドとして、医師、看護師、ソーシャルワーカー等の協力を得、患者との面接を行い、講師のスーパーヴィジョンを受けて、実際的にカウンセリングを学ぶ。		
<履修条件> 講義は登録者2人以上から6人未満で成立する。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 自叙伝の発表 第3回 牧会を考える映画を見る。 第4回 第3回の授業で見た映画のディスカッションを行う。 第5回 院長による精神病理の講義。病院見学。 第6回から第15回まで、様々な牧会ケアテーマで学び、自分の牧会者像を明確にする。 *病棟で患者と面接を行い、ケアを与えることを学ぶ。 *面接記録をスーパーヴァイザー（担当教員）に提出し、コメントをうける。 *各学生によるケース提出とディスカッションを行う。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 遅刻をしないこと。 休まないこと。		
<テキスト> 必要に応じて配る。		
<参考書・参考資料等> 聖書		
<学生に対する評価（方法・基準）> 実習の参加度によって評価する。出席が2/3に満たない者は評価の対象としない。 期末面談によって評価する。「共通評価指標（1）」によって評価する。		

組織神学専攻・実践神学関係		
臨床牧会教育 b	ウェイン・ジャンセン	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	該当せず	
<授業のテーマ> 病院での実習により、牧会的な心得を身につけること。		
<到達目標> 自分の牧会者像を明確にする。		
<授業の概要> 吉祥寺病院（精神科）を実習のフィールドとして、医師、看護師、ソーシャルワーカー等の協力を得、患者との面接を行い、講師のスーパーヴィジョンを受けて、実際的にカウンセリングを学ぶ。		
<履修条件> 臨床牧会教育 a を終えていること。 講義は登録者 2 人以上から 6 人未満で成立する。		
<授業計画> *各回、各病棟におもむき、患者と出会い、カウンセリングを行う。 *面接記録（逐語記録）をつくり、スーパーヴァイザー（担当教員）に提出し、コメントを得、話し合いをする。 *各自のケース・レポートをし、ケース・スタディをする。 第 1 回から第 15 回まで、様々な牧会ケアテーマで学び、自分の牧会者像を明確にする。		
<準備学習等の指示>1 回の授業あたりの授業外学習は 180 分～240 分を目安とする。 遅刻をしないこと。 休まないこと。		
<テキスト> 必要に応じて配る。		
<参考書・参考資料等> 聖書		
<学生に対する評価（方法・基準）> 実習の参加度によって評価する。出席が 2 / 3 に満たない者は評価の対象としない。 期末面談によって評価する。「共通評価指標（1）」によって評価する。		

専攻間共同科目		
アジア伝道論演習 a	朴 憲郁	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>なし	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 東南アジアにおけるキリスト教伝道		
<到達目標> キリスト教は学問理論として研究・考察され得るが、何よりも歴史の中に働く神の啓示たるイエス・キリストの福音の力として、実践的行為において存続する。それは、キリスト共同体形成と福音伝道の形をとる。この福音伝道を理論的、歴史的に考察し、特にアジア的文脈においてこの伝道の構築を目指す。		
<授業の概要> 東南アジアにおけるキリスト教伝道の展望を模索する。最初に、アジア伝道論の緒論的問題を講じた後、今回はタイとシンガポールで宣教と神学教育に携わった神学者、小山晃佑の宣教論を手掛かりに考察していく。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回： 伝道（宣教）学とは何か 第2回： アジアにおけるキリスト教－文化的、伝道論的視点から 第3回： 『水牛の神学』－歴史を解釈する－（1～2章） 第4回： 歴史を解釈する－（3～4章） 第5回： 福音を根付かせる－（5～6章） 第6回： 福音を根付かせる（7～8章） 第7回： 福音を根付かせる－（9～10章） 第8回： タイ仏教に直面して（11章） 第9回： タイ仏教に直面して（12章） 第10回： タイ仏教に直面して（13章） 第11回： 文脈におけるキリスト教信仰の解釈（14章） 第12回： 文脈におけるキリスト教信仰の解釈（15章） 第13回： 文脈におけるキリスト教信仰の解釈（16章） 第14回： 文脈におけるキリスト教信仰の解釈（17章） 第15回： 文脈におけるキリスト教信仰の解釈（18章）		
<準備学習等の指示>1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 講義をするが、受講者もテーマに従って発表していただく。次週授業で扱うテキスト箇所は皆が事前に読んで予備知識をもち、議論に参加できるよう心がけること。		
<テキスト> 小山晃佑著、森泉弘次訳、『水牛神学』－アジアの文脈のなかで福音の真理を問う－教文館、2011年各自で入手すること。		
<参考書・参考資料等> ・日本基督教団出版局編、『アジア・キリスト教の歴史』日本キリスト教団出版局、1991年 ・『アジア・キリスト教史[2]』初版、重版、教文館、1985年その他、授業時に随時紹介する。 ・朴憲郁、「日本プロテスタント伝道の一考察－アジア伝道の視点から－」 『神学』71号 2009年12月		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業時の発表、参加度、学期末レポート（6000字程度）などによって評価する。 出席が2/3に満たない者は評価の対象としない。共通評価指標（1）①～④に基づいて評価する。		

専攻間共同科目	
アジア伝道論演習 b	朴 憲郁
	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>なし
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）
<授業のテーマ> 今日の伝道(宣教)学	
<到達目標> アジア諸国への福音伝道は、誰がどのような展望と使命によって推進されたのか、また伝道された非キリスト教諸国の人々は独自の文化・宗教・言語圏の中でどのように受容し、反応したのかを知る。それをこのたびは、20世紀後半の代表的宣教学者の伝道理解を学ぶ。	
<授業の概要> 伝道(宣教)学とは何かを序論として解説した後、ヒンドゥー教国のインドで長年宣教活動にたずさわったイギリス出身の宣教師、レスリー・ニュービギンの「宣教学」を一つ一つ学ぶ。	
<履修条件> 等になし	
<授業計画> 第1回 序説1－伝道（宣教）学とは何か－ 第2回 序説2（その1）－キリスト論的三位一体論 第3回 序説2（その2）－キリスト論的三位一体論における諸宗教との対話－ 第4回 序説3－韓国におけるキリスト論的三位一論の展開の試みとその批判 （以下、テキストに従って、第5～14回まで学生発表と講義） 第5回 議論の背景 第6回 権威の問題 第7回 三位一体の神の宣教 第8回 御父の御国を宣べ伝えること－信仰としての宣教－ 第9回 御子の生を分かち合うこと－愛としての宣教－ 第10回 聖霊の証しを担うこと－希望としての宣教－ 第11回 福音と世界の歴史 第12回 神の正義のための行動としての説教 第13回 教会成長、改宗、文化 第14回 諸宗教の中の福音 第15回 アジア伝道の反省と展望（講義）	
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 指定テキストの中から、毎授業で扱う範囲の箇所を事前に読んで理解を深めておくこと。随時発表もしていただく	
<テキスト> レスリー・ニュービギン、『宣教学入門』、鈴木脩平訳、日本キリスト教団出版局編、2010年 各自で入手する。	
<参考書・参考資料等> 朴憲郁(Heon-Wook Park) Perspective of the Northeast Asian Mission from the Viewpoint of Pauline Theology: Focused on Christology 『神学』72号、東京神学大学神学会、教文館、2010年、143～166頁	
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業時の発表、参加度、学期末レポート（6000字程度）などによって評価する。 出席が2／3に満たない者は評価の対象としない。共通評価指標（1）①～④に基づいて評価する。	

実践神学研修課程		
説教学演習 I	小泉 健	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 説教の本質を問う説教学的議論に触れつつ、説教作成の方法を吟味し学ぶ。		
<到達目標> 説教作成の方法を職人芸のようにして身につけるだけではなく、つねに説教学的な反省と結びつけながら批判的に習得し、説教者として自己研鑽していくための土台を得ること。		
<授業の概要> 説教準備の一つ一つの段階の意味について考察しつつ、最初の黙想から説教行為までの実際に取り組む。		
<履修条件>		
<授業計画> 第1回 説教と聖書、説教テキストの朗読 第2回 黙想とは何か 第3回 説教学の課題 課題①第一黙想の提出 第4回 釈義と説教準備 第5回 歴史的方法と正典、礼拝における「聖書」、釈義とは何か 第6回 説教学的な聖書の解釈、「解釈と適用」の問題 課題②釈義の提出 第7回 説教黙想とは何か 第8回 釈義と教理、説教と教義学 第9回 説教における説教者 課題③説教黙想の提出 第10回 会衆をめぐる黙想 第11回 キリストの物語とわたしたちの生活 第12回 説教と救済史、終末をめぐる黙想 課題④第二の説教黙想の提出 第13回 説教の構造と構成 第14回 説教の始め方と終わり方 第15回 説教の演述 課題⑤説教原稿の提出		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 聖書全巻を通読しておくこと。日々の祈りと黙想の生活を確立すること。 説教作成の各段階の作業をていねいに行うこと。		
<テキスト> 聖書		
<参考書・参考資料等> R. ボーレン『説教学Ⅰ』『説教学Ⅱ』日本基督教団出版局（Ⅱはオンデマンド） その他については、テーマごとに教室で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 説教作成の諸段階で、その都度レポートを提出する。 評価にあたっては、共通評価指標（1）の①～③を重視する。		

実践神学研修課程		
説教学演習Ⅱ	小泉 健	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 説教学の基本を学び、会衆席の説教学として実際になされた説教を分析する方法を身につける。		
<到達目標> 多様な説教に触れて説教理解を拡大し、説教を享受する力を磨くこと。		
<授業の概要> 説教分析の方法論を明確にし、実際になされた説教を取り上げて、説教分析に実際に取り組む。		
<履修条件>		
<授業計画> 第1回 会衆席の説教学 第2回 説教分析と説教分析論 第3回 分析（1）植村正久の説教を読む 第4回 分析（2）竹森満佐一の説教を読む 第5回 分析（3）加藤常昭の説教を読む 第6回 分析（4）ルターの説教を読む 第7回 分析（5）カルヴァンの説教を読む 第8回 分析（6）マルティン・ルーサー・キングの説教を読む 第9回 分析（7）バーバラ・ブラウン・テイラーの説教を読む 第10回 分析（8）ウィリアム・ウィリモンの説教を読む 第11回 分析（9）カール・バルトの説教を読む 第12回 分析（10）ヴァルター・リュティの説教を読む 第13回 分析（11）ルドルフ・ボーレンの説教を読む 第14回 分析（12）クルト・マルティの説教を読む 第15回 説教の研鑽 *取り上げる説教を仮に挙げているが、実際には、受講者自身の説教、もしくは受講者が希望する説教を取り上げる。		
<準備学習等の指示>1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 聖書全巻の通読を続けること。毎回配布される説教を十分読んで準備すること。		
<テキスト> 授業時に、次回読む説教をプリントにして配布する。		
<参考書・参考資料等> 加藤常昭『説教批判・説教分析』教文館、2008年。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表と授業への参加度、レポートによって評価する。 評価にあたっては、共通評価指標（1）の①と③を重視する。		

実践神学研修課程		
説教学演習Ⅲ	神代 真砂実	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 修士論文を提出し、前期課程を修了見込みである者。原則として必修。	
教職課程における要件・区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> テキストの釈義から、黙想を経て、説教するに至るまでの過程を、実際に経験しながら学ぶ。		
<到達目標> ①説得力のある説教が出来る説教者となるための基本を身に着ける。②説教を評価する批判的視点を獲得する。		
<授業の概要> 実際にチャペルで説教することを中心とする（1名につき2回）が、その前に、釈義・黙想の基礎を確認し、また、説教の作成にあたって留意しなければならない点を確認する。		
<履修条件> 前期課程2年次に在籍し、修士論文を提出し、前期課程を修了見込みである者。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション——説得力のある説教とはどのようなものか 第2回 本学チャペル礼拝を想定した10分の説教の準備①釈義 *テキストは全員共通（マルコ2：1～12）とする。 第3回 本学チャペル礼拝を想定した10分の説教の準備②黙想 第4回 本学チャペル礼拝を想定した10分の説教（2名ずつ）① 第5回 本学チャペル礼拝を想定した10分の説教（2名ずつ）② 第6回 本学チャペル礼拝を想定した10分の説教（2名ずつ）③ 第7回 本学チャペル礼拝を想定した10分の説教（2名ずつ）④ 第8回 本学チャペル礼拝を想定した10分の説教（2名ずつ）⑤ 第9回 本学チャペル礼拝を想定した10分の説教（1名）⑥・まとめ 第10回 教会での主日礼拝説教（テキストは任意）を想定した20～30分の説教（2名ずつ）① 第11回 教会での主日礼拝説教を想定した20～30分の説教（2名ずつ）② 第12回 教会での主日礼拝説教を想定した20～30分の説教（2名ずつ）③ 第13回 教会での主日礼拝説教を想定した20～30分の説教（2名ずつ）④ 第14回 教会での主日礼拝説教を想定した20～30分の説教（2名ずつ）⑤ 第15回 教会での主日礼拝説教を想定した20～30分の説教（1名）⑥・まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 授業とはいえ、説教を語るのだから、祈りつつ、周到な準備をすることが必要である。また、他の学生の説教のよい聴き手・批評者となるよう心がけること。		
<テキスト> 聖書（新共同訳）		
<参考書・参考資料等> 説教の準備に必要なもの（聖書原典および各種翻訳・註解書・黙想集・説教集など）。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 説教に関し、総合的に評価する（70%）。また、批評力も評価する（30%）。共通評価指標（1）を参照する。		

実践神学研修課程		
礼拝学演習	小泉 健	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 礼拝学の基本、特に教会の礼拝を司る者が身につけるべき礼拝学的思考の特質を学ぶ。		
<到達目標> 教会や学校で礼拝を整え、奉仕者を指導し、結婚式、葬式等の諸式を執り行うことができるようになること。		
<授業の概要> 主日礼拝の主要な要素や、主日礼拝以外の諸礼拝、結婚式、葬儀などについて、毎回テーマを定め、参加者の発表を通して学ぶ。		
<履修条件>		
<授業計画> 第1回 礼拝学的思考の特質について 第2回 聖書における礼拝 第3回 宗教改革の礼拝 第4回 典礼の刷新、東方教会の奉神礼 第5回 現代の礼拝、礼拝改革 第6回 礼拝式と祈祷、祝祷、司式の役割 第7回 賛美、礼拝音楽 第8回 献金・奉獻、礼拝奉仕 第9回 洗礼式、幼児洗礼と幼児祝福 第10回 聖餐礼典 第11回 結婚式・婚約式 第12回 葬儀 第13回 礼拝堂、礼拝堂の使用 第14回 教会暦と聖書日課 第15回 教会学校の礼拝、学校礼拝		
<準備学習等の指示>1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 それぞれのテーマについて自分なりの課題や意見を整理して演習に臨むこと。		
<テキスト> 必要に応じて教室で指示または配布する。		
<参考書・参考資料等> 由木康『礼拝学概論』新教出版社、2011年。 W. ナーゲル『キリスト教礼拝史』教文館、1998年（オンデマンド）。 その他については第1回の授業時にテーマごとに紹介する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表と授業への参加度によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標（1）の①と③を重視する。		

実践神学研修課程		
牧会学演習	小泉 健	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
教職課程に おける要件・ 区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 実践神学を牧師学としてとらえ、牧師が身につけるべき基本を学ぶ。		
<到達目標> さまざまな牧会の場面において、ふさわしい対応ができる基礎を得ること。ただ一つの正解があるわけではなく、その都度の対応が求められるが、それを神学的に反省する力を身につけること。		
<授業の概要> 牧師が担うべき教務、牧師が実践活動を行う場面を一つずつ取り上げ、参加者の発表を通して必要な知識と方法を身につける。		
<履修条件>		
<授業計画> 第1回 牧師学としての実践神学 第2回 召命と准允・按手、「牧師職」、赴任と離任、招聘制度と牧会 第3回 教会でのふるまい、教会での人間関係 第4回 告解・面談・訪問 第5回 結婚と離婚、同性愛 第6回 キリスト者の家庭と信仰の継承 第7回 病者の牧会、病床訪問 第8回 精神障がい者の牧会、牧会カウンセリング 第9回 高齢者の牧会 第10回 葬儀とその周辺 第11回 洗礼への導きと受洗準備、受洗後教育 第12回 聖餐と牧会 第13回 教会戒規 第14回 教会会議（教会総会、役員会）と議長職 第15回 全体教会と個教会、教会の制度、教会共同体の形成		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 それぞれのテーマについて自分なりの課題や意見を整理して演習に臨むこと。		
<テキスト> 必要に応じて教室で指示または配布する。		
<参考書・参考資料等> E. トゥルナイゼン『牧会学Ⅰ』『牧会学Ⅱ』日本基督教団出版局、1961、1970年（オンデマンド）。 ウィリアム・ウィリモン『牧師』新教出版社、2007年。 その他については第1回の授業時にテーマごとに紹介する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表と授業への参加度によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標（1）の①と③を重視する。		

実践神学研修課程		
総合特別講義	小泉 健	<担当形態> オムニバス
後期・4単位	<登録条件> 修士論文を提出し、2024年4月に教会・学校に赴任する意志の明確な者	
教職課程における要件・区分等	教員免許状取得のための選択科目（中学校及び高等学校） <科目> 教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 宗教）	
<授業のテーマ> 牧会・伝道上直面する具体的な問題に適切に対応していくために専門家の指導を受ける。		
<到達目標> 牧会上の典型的な問題とその対策を理解し、自分なりに応用していくための基礎を身につける。		
<授業の概要> それぞれ分野の専門家が、テーマごとに二コマを単位として講義を行う。		
<履修条件> これまでの学びを総合する重要な授業なので、原則として全回出席すること。		
<授業計画> 第1回、第2回： 道家紀一 「日本基督教団 教憲・教規Ⅰ」 第3回、第4回： 篠浦千史 「障がい者と教会」 第5回、第6回： 棚村重行 「エキュメニズムⅠ（世界のエキュメニズム）」 第7回、第8回： 落合建仁 「日本基督教団史Ⅰ（日本基督教団成立前）、（日本基督教団成立後）」 第9回、第10回： 宮本義弘 「部落解放とキリスト教」 第11回、第12回： 朴憲郁 「エキュメニズムⅡ（東アジアのエキュメニズム）」 第13回、第14回： 齋藤篤 「キリスト教系諸宗団の問題」 第15回、第16回： 小林光 「教会付属幼稚園・保育園(所)の諸問題」 第17回、第18回： 道家紀一 「日本基督教団 教憲・教規Ⅱ」 第19回、第20回： 洪性完 「在日コリアン問題」 第21回、第22回： 山崎ハコネ 「高齢者ケアと牧会」 第23回、第24回： 野田沢 「青年伝道」 第25回、第26回： 小島誠志 「地方伝道」 第27回、第28回： 長山信夫 「日本基督教団史Ⅱ（教団史と紛争史の視点）、（教団紛争とは何であったか?）」 第29回、第30回： 加藤幹夫 「牧会者の試練とその克服」 第31回、第32回： 近藤勝彦 「東京神学大学史Ⅰ」 第33回、第34回： 近藤勝彦 「東京神学大学史Ⅱ」 第35回、第36回： 山崎忍 「刑務所伝道」 第37回、第38回： 高橋貞二郎 「学校伝道と教会」 第39回、第40回： 春原禎光 「ITと伝道」 * 講師は予定。 講義は金曜・土曜の1、2時間目に行われる。また、1月上旬に開催される『教職者のためのオンライン・シンポジウム』への参加も課す（講師、日程および講義概要は当該年度に決定する）。		
<準備学習等の指示> 日本基督教団の補教師試験を受験する者は、「補教師試験の過去問題集」に目を通しておくこと。		
<テキスト> 「教務関係書式集」「日本基督教団教憲教規および諸規則」等、講師がその都度指示する。		
<参考書・参考資料等> 担当教員、講師がそれぞれの講義の中で紹介する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 教職セミナーを含む毎回の講義の出席を評価の前提とする。学期末には、牧会にあたってとくに有益であったことをまとめたレポート（約2000字）を作成する。その末尾に今後の総合講義に対する意見も述べる。		